

現代朝鮮語の特殊助詞の目録について

任明秀

北海道大学大学院文学研究科博士後期課程

1. はじめに

1. 1. 研究の対象と目的

現代朝鮮語において、特殊助詞¹⁾とされるものの数は、研究者によって異なり、本稿において先行研究として取り上げたものも、各研究者が挙げている数は13~23個と大きな違いを見せている。

既存の研究で特殊助詞として挙げられている項目を概観すると、格助詞や並立助詞との対比において、特殊助詞とそれらとの区分が比較的明確であるものが先行研究で一致した項目となっており、それらが多数を占めている。またそれらに格助詞や並立助詞と特殊助詞との区別が曖昧なもの、または語尾、接尾辞、不完全名詞などと特殊助詞との区別が曖昧であるものが加えられている場合もある。

このような違いがもたらされる原因は、先行研究の多くが特殊助詞の意味に関する考察に比重を置き、そこから項目を設定しようとしている点にあり、またそれは形態、統語の両面からの検討が十分になされていないということを表している。

本稿で考察するのは‘가지고’, ‘-까지’, ‘-나’, ‘-나마’, ‘-든지’, ‘-라도’, ‘말고’, ‘보고’, ‘-부터’, ‘치고’, ‘-는커녕’の計11個である。²⁾

これらは先行研究において、見解が一致していない特殊助詞である。

本稿は既存の研究で特殊助詞とされてきた目録を再度検討し、整理するのが目的である。

1. 2. 研究の方法

分析に用いた研究資料は、現在韓国で出版されている新聞、文学作品、シナリオとインターネットから収集したものである。用例の数は、考察対象とした11個の形態素につき、それぞれ300~500例である。

収集した用例以外に必要と思われるものは、インフォーマント³⁾に作例を依頼し、分析にあたった。

2. 先行研究

特殊助詞に関する研究は、文法概説書などを含めると、その数は多数にのぼるが、先に述べたように、それらのほとんどが特殊助詞の意味に関する考察であり、

各研究者が特殊助詞として項目を挙げる際、それらを特殊助詞として見做した理由について触れられていないものがほとんどである。

本稿ではその中でも、従来の研究で特殊助詞として挙げられてきた形態素が、果たして特殊助詞であるか否かを詳細に検討した채완 (1993),(1995)、韓国において ‘-이-系特殊助詞’ と呼ばれるもののみを扱った최동주 (1999)、そして助詞と語尾、接尾辞、不完全名詞との区別が曖昧なものについて、それらの分類を試みた남윤진 (2000) を先行研究として主に取り上げる。

これらについては本論において、個々の形態素を検証する過程で随時触れたいと思う。

次頁の表は、特殊助詞について言及した研究のうち、意味の考察を中心にしているものも含まれるが、数多の研究の中では比較的詳細に記述されているものであり、それぞれが参考文献として引用される頻度の高いものである。

研究者がどのような形態素を特殊助詞として見立てているのかを一覧するためにこの表を記した。⁴⁾

	최현배 (1961)	채완 (1977)	성광수 (1979) (1999)	홍사만 (1983)	김승곤 (1989)	채완 (1993)	채완 (1995)	홍사만 (2002)
가운데	○							
까지	○	○	○	○	○	(○)	(○)	○
나	○	○		○	○	○	(○)	○
나마	○	○	○	(○)	○	○	(○)	(○)
ㄴ들	○			(○)	○			(○)
는	○	○	○	○	○	(○)	(○)	○
다가			○				○	
대로					○			
더러					○			
도	○	○	○	○	○	(○)	(○)	○
든지	○			(○)	○			(○)
라도	○		○	○	○	○	(○)	○
라면					○			
마다	○			(○)	○		○	(○)
마저	○	○	○	○	○		(○)	○
만	○	○	○	○	○		(○)	○
밖에	○			(○)	○			(○)
부터	○		○	(○)	○			(○)
뿐					○			(○)
서			○		○		○	
서건	○							
써			○					
씩					○		○	
안으로	○							
야	○	○	○	○	○	○	(○)	○
야말로	○				○	○	(○)	(○)
에서 부터					○			
조차	○	○	○	○	○		(○)	○
치고	○							
커녕	○						○	

この表で特殊助詞と認めることで見解が一致しているものは, ‘까지’, ‘-나마’, ‘-는’, ‘-도’, ‘-라도’, ‘-마저’, ‘-만’, ‘-야’, ‘-조차’であるが, これらも現われる環境によって, 特殊助詞と見做せない場合がある. これについては, 3. の本論で詳しく述べたい.

以下に表のうち, 本稿で考察対象外としたものについて, その理由を簡単に説明する.

まず, ‘-더러’, ‘-에서부터’は格としての機能を有しており, これらは特殊助詞から除外される.

‘-씨’については, 성광수(1999)において具格助詞 ‘-로씨’が, 具格助詞の他の形式である ‘-로’があることから, 先の ‘-로씨’を ‘-로’ + ‘-씨’と分解したものであるが, これは現代朝鮮語において ‘-씨’という形態素が単独で存在しない以上, ‘-씨’は具格助詞の一部と見做すべきであると筆者は考える. 同様に, 채완(1995)における ‘-서’と ‘-다가’も, それぞれが格助詞の一部である場合と, 語尾の場合とを一括して特殊助詞としているが, これらは全く別の形態素として見做すべきものであって, 特殊助詞として括れるものではない.

次に ‘가운데’は自立性があり, 名詞と見做される. ‘안으로’は名詞+助詞と見て差し支えないだろう⁵⁾. また, ‘-대로’「-まま」と ‘-뿐’「-ばかり」は, それ自体に自立性が無く, 連体修飾を受けることから, 不完全名詞と見做し, 本稿から除外する.

ただし, ‘-밖에’については「-の外に」と「-しか」という二つの用法があり, 前者は名詞+助詞と見做しうるが, 後者は特殊助詞と考え得る. 日本語の「-しか」がそうであるように, 後者の場合の朝鮮語 ‘-밖에’も否定形との結び付きが必須であるが, この際, 日本語の取り立て助詞, 特殊助詞の双方で特徴とされている任意性はない. つまり文中で当該の形態素を落とすと非文になってしまうものである.

任(2005)でも述べたように, ‘-도’「-も」も ‘-조금’「少し」などといった, 一部の副詞と結び付く際に, 必ず否定文の中で用いられるという制限があり, 任意性がない. こういった否定を表す文と特殊助詞との関係は今後の課題とし, 本稿では扱わないことにする.

‘-라면’については, 채완(1993)は語尾としており, 筆者もその分析を支持する. ‘-서건’についても, 최현배(1961)のみが特殊助詞としているが, これについて채완(1995)は, 現代朝鮮語において使われる頻度が非常に低いとし, そのためか詳しい検討がなされないまま並立助詞の可能性が高いとすに留まった. 筆者も ‘-서건’の用例を収集することができなかつたためこれを除外する.

また同様に ‘-ㄴ들’についても, 現代語で用いられる頻度が低いこともあって, これについて言及している채완(1995), 최동주(1999)もそれぞれ認め方が異なる. 前者はこれを語尾とし, 後者は特殊助詞としているが, 筆者が行ったイ

ンフォーマントチェックでも ‘-ㄴ들’ を語尾とするのか特殊助詞とするのか、その判定に揺れが甚だしいことや、収集できる用例の数の少なさからも、これらを対象外とせざるを得ない。

次に、研究者によって接尾辞と特殊助詞とに認め方が分かれる, ‘-마다’ と ‘-씩’ についてであるが, 채완(1995)と남윤진 (2000) では, これらを特殊助詞としている。

‘-마다’ について채완(1995)は, 「体言の後ろに付いて, ‘みな, 各々’ という意味を表す特殊助詞」とするに留まり, 具体的な検証は行っていない。남윤진 (2000:184) も「助詞の分類」とする一覧に ‘-마다’ を挙げているが, 具体的な記述はない。

一方 ‘-씩’ について채완(1995)は, 数詞+名数詞+·씩の形式で ‘-씩’ は直前の名数詞に限らず, 数詞も含めて関与するというように, ‘-씩’ は直前の単語を越えて関与することから, 接尾辞ではなく特殊助詞と見做した。남윤진 (2000) も同様な指摘をしており, また, 従来の研究で接尾辞とされて来た理由の一つとして, ‘-씩’ はその先行語に, 単位名詞, 時間名詞, 頻度副詞を取るといった制約があるとされて来たが, これについて남윤진 (2000) は, このような制約は語彙的なものではなく, 範疇化できるとし, ‘-씩’ を助詞と分類した。

남윤진 (2000) はこの他に, ‘-들’, ‘-쯤’, ‘-마냥’ なども先に挙げた理由, つまり接尾辞が一単語内部に関与するのに対し, これらがその範囲を超える点や, 先行語の語彙的制約の観点, つまり当該の形態素に生産性があるか否かといったことから, 助詞と判定した。

また, 先に本稿で除外するとした不完全名詞の ‘-뿐’ や ‘-대로’ も남윤진(2000) では, 各々が接続形語尾, 名詞+格助詞に接尾することから助詞とした⁶⁾。

現代朝鮮語には接尾辞に限らず, 不完全名詞などが助詞的な振る舞いをするものが多数存在するようである。この問題について, 現時点では筆者が資料を詳細に分析していないことから断定しかねるが, 格助詞と特殊助詞の結合の順序や, 助詞的な機能が見受けられる際に任意性が適用されるか否かということが, これらの境界を見極める重要な鍵になると思われる。従ってこの問題の考察については, 個々の特殊助詞の特徴, 及び全体像をもって, 分析を行わなければならないと考えるので, 今後の課題とする。

残りについては, まず ‘-도’, ‘-마저’, ‘-조차’ は任(2005)において言及したので, 本稿では新たに考察しない。次に ‘-는’, ‘-만’, そして強調や対照を表す ‘-야’, ‘-야말로’ の考察については今後の課題とする。

3. 本論

3. 1. 格助詞及び並立助詞との識別

3. 1. 1. -까지

‘-까지’は格助詞として機能する場合と、特殊助詞として機能する場合がある。まず格助詞としての‘-까지’について述べる。

‘-까지’が格助詞として機能する場合には、その後ろに来る動詞との論理的な関係⁷⁾を示すので、任意性はない。そして‘-까지’が接尾した語は状況語⁸⁾として文の構成に参加している。

- (1) “앞으로 격주로 시청이 토요일 휴무를 하게 되면—지금은 격주가 아니라 매주 토요일이 휴무하게 되었지만—우리 노인들은 점점 불편하게 된다. 우리가 시청에 일보러 갈 때는 차를 탈 수 없다. 젊은 아들이나 며느리가 귀가할 때까지 기다려야 한다. 그러나 그런 날은 토요일이다. 토요일이 되면 가서 일을 보아야지 했더니 시청은 휴무란다.” (K)

「これから隔週で市庁が土曜日休業(を)することになれば—今は隔週ではなく毎週土曜日休業するようになったが—我々老人たちは段々不便になる。我々が市庁に用事をすませに行くときは車に乗れない。若い息子や嫁が帰宅するときまで待たなければならない。しかしそんな日は土曜日だ。土曜日になったら行って用事すませようとしたら市庁は休業だそうだ。」

- (2) 대도시 서울의 지하수가 100m 까지 썩어 식수는커녕 허드렛물로도 사용하기 힘들다는 판정이 나왔을 때도 태연한 사람들이 있었고 다만 그 모든 암울한 일들의 시기가 생각보다 빠르다는 데, 그리고 생각보다 심각하다는 데에 놀랄 뿐입니다.(K)

大都市ソウルの地下水が100mまで腐り飲料水どころか飲み水以外としても使用するのが難しいという判定が出たときも泰然とした人たちはいたし、ただそのすべての暗鬱なことの時期が思ったよりも早いということ、そして思ったよりも深刻だということに驚くだけです。

- (3) 오히려 삶을 더욱 복잡하게 만들도록 조장할 뿐이다. 더욱 방심할 수 없는 것은 그 많은 항목 중에서도 우리가 놓치고 있는 부분이 있다는 사실이다. 사람들은 매일의 일정이 마지막 1 분까지 계획되어 있지 않으면 가끔은 자기 몫의 일을 놓치게 된다.(K)

むしろ人生をより複雑にするように助長するだけだ。さらに油断できないのはその多くの項目(の)中でも私たちが見落としている部分があるという事実である。人々は毎日の日程が最後の1分まで計画され

ていなければ時々自分の分の仕事を損なうようになる。

用例に見るように、‘-까지’が格助詞として機能する場合は、X까지 PのXは、時、場所、空間などを表す語であり、またPもXによって示されるものの移動、範囲、限界を表すのである。つまり‘-까지’はXとPの論理関係を示しており、この際、文中の‘-까지’は不可欠であり、任意性はない。このような場合、特殊助詞とは厳密に区別されるものである。

次に特殊助詞の場合について述べる。

‘-까지’が特殊助詞である場合には、任意性が認められる。特殊助詞、或いは日本語の取り立て助詞における任意性については、任(2005)にて詳しく論じたが、以下に再び述べる。

沼田(1986:112)は、取り立て助詞自体には固有の意味、機能があるので、取り立て助詞がある文と無い文とは意味が異なるので、それらは次の例文にみるように別の文であるとした。

- (4) a.太郎は電車の中でφ勉強する。
b.太郎は電車の中でも勉強する。

(4)で見ると⁹⁾、取り立て助詞はそれがなくても文の成立に支障をきたさないとした上で、その任意性について次のように述べている。

「…構文論的な観点から見て、一文の構成に直接関与するか否かというレベルでは、とりたて詞は必須の要素ではない。つまり、文構成上任意の要素であるということである。そこで、この特徴を任意性と呼ぶことにする。」

また、任意性に関連した朝鮮語の特殊助詞の特徴として홍사만(1983)他は、特殊助詞が格標識として用いられないことと、構文的な機能を持っていないことを挙げており、その説明として文中で主格・対格助詞は、特殊助詞が付け加わる際に義務的に削除されるのに対し、処格助詞や与格助詞といった他の格助詞に特殊助詞が結び付く場合は、それらの格助詞は削除されないことを挙げている。

これは日本語の取り立て助詞にも共通し、(4)のように処格助詞と取り立て助詞との結合では、格助詞が削除されないのに対し、「太郎も行く」のように、文の成分として主語を表す語と取り立て助詞が結び付く場合は、主格助詞は義務的に削除される。

つまり取り立て助詞、或いは特殊助詞が、主語や目的語と結び付いている場合は、主格助詞、対格助詞を復元して考えなければならないのである。

‘-까지’が特殊助詞である場合も同様に、それが接尾する語が文の成分として主語や目的語になる場合、主格助詞、対格助詞を復元しなければならない。

- (5) 오늘 주식시장에서는 기아사태 처리 지연과 우성식품의 화의 신청 등으로 기업의 자금악화에 대한 불안심리가 커진 가운데 비자금 파문에 따른 정국불안 우려까지 겹쳐 종합주가지수가 어제보다 19.59 포인트 하락한 610.44 포인트로 마감됐습니다.(K)

本日株式市場ではキア事件(の)処理(の)遅れとウソン食品の和解(の)申請などで企業の資金悪化に対する不安心理が膨らんだ中、隠し資金(問題の)波紋による政局不安の憂慮まで重なり総合株価指数が昨日より19.59ポイント下落した610.44ポイントで終わりました。

- (6) 서울의 경우 오늘 아침에는 영상 기온을 기록했지만 낮 최고 기온이 3.2도에 불과하더니, 오후 들어 수은주가 영하권으로 떨어졌습니다. 갑자기 찬바람까지 불어 닥쳤습니다. 두꺼운 옷에 목도리까지 감았지만 추위는 피할 수 없습니다.(K)

ソウルの場合今朝にはプラス(の)気温を記録しましたが昼(の)最高気温が3.2度に過ぎず、午後に入って水銀柱が零下に落ちました。急に冷たい風まで吹きました。厚着した服装にマフラーまで巻きましたが寒さは避けることができません。

- (7) 아울러 어제 밤 서석재 의원이 일부 비주류측 수뇌부들과 만나 동반탈당을 권유함에 따라 소속의원들의 이탈이나 동요를 막는데도 당력을 기울이고 있습니다. 국민회의는 자민련과의 대선후보 단일화 협상이 급진전됨에 따라 양당외에 다른 정파까지 참여시키는 공동선거대책본부 구성을 추진해 나가기로 했습니다.(K)

合わせて昨日(の)夜ソクチェ議員が一部(の)非主流側(の)首脳部たちと会い、同伴脱党を勧誘したことによって所属議員たちの離脱や動揺を防ぐのにも党力を傾けています。国民会議は自民連との対戦候補(の)単一化協議が急進展するにしたがって両党以外に他の政党まで参与させる共同選挙対策本部構想を推進していくことにしました。

- (8) 자영이 보기에 두 규수는 지극히 아름다웠다. 특히 김병학의 딸은 여자인 자영의 가슴까지 울렁거리게 할 정도로 아름다웠다.(K)

チャヨンが見るに二人の娘は非常に美しかった。特にキムビョンハクの娘は女であるチャヨンの胸まで高鳴らせるほどに美しかった。

(5)와(6)의는 처음의 下線部는 主語에, (6)의 二番目の 下線部와(7), (8)는 目的語에 ‘-까지’가 結び付いたものである. 이들은 先に見た 格助詞の場合とは異なる

り, ‘-까지’ が接尾する語は場所, 時, 空間を表していない.
寺村(1991:116)は次の例,

(9) 犬までおれをバカにする.

を挙げて, 日本語「一まで」の格助詞と取り立て助詞との識別に関して, 「N (本稿のX) が時間・空間上の一点を示すという意味特徴を元来持たないもの」に「一まで」が接尾する場合を取り立て助詞としたが, 実際には次の例でわかるように, XのみならずPの意味も問題となる.

(10) 자영의 가슴까지 물이 올랐다. (作)
チャヨンの胸まで水が上がった.

これは特殊助詞と見做した(8)のXにあたる部分をそのままにして, Pにあたる部分を変えたものであるが, ここで‘-까지’は格助詞として働いている. ‘-까지’はXである‘가슴’「胸」とPに相当する「水が上って来た」とを結び, XをPが及ぶ場所として示している. つまり状況語になっている.

(10)の日本語訳からもわかるように, これは日本語にも当てはまることである. 寺村はX (取り立て助詞と結び付く語) の意味だけに焦点を当て, そこで格助詞と取り立て助詞の区別を行う試みをしたが, 実際には, 取り立て助詞と結び付いた語が, どういった文の成分になるのかが識別する際の基準になるのである.

つまり‘-까지’が接尾するXとPとの関係において, Xが場所, 時, 空間以外を表す語であったとしても, PがXの及ぶ範囲, 限界を示しているのであれば, ‘X까지’は文中で状況語になるわけで, その場合‘-까지’は格助詞として見做されるのである.

ただし, 両者の区別が判然としない場合もある.

(11) 또 항의 편지를 자세히 쓰는 사람들의 경우에는 편지를 완성하는데 몇 시간이 걸리기도 할 것이다. 항의 편지를 쓴 사람이 자신의 편지를 복사해 두려고 할 때는 그 지역에 있는 복사실까지 다녀와야 한다. 그리고 우체통이나 우체국으로 가서 편지를 부치고 답장을 기다려야 한다. (K)

また抗議 (の) 手紙を詳細に書く人たちの場合には手紙を完成させるのに何時間かかかることもあるだろう. 抗議 (の) 手紙を書いた人が自分の手紙を複写しておこうとするときはその地域にある複写室まで行って来なければならない. そしてポストや郵便局に行って手紙を送って返事を待たなければならない.

- (12) 명우는 먼 곳을 보고 있었다. 모르는 사이에 천장 한구석에 거미가 거미줄을 쳐 놓은 것이 보였다. 언제 저 거미는 어떻게 구층까지 올라와서 언제 저 구석진 영토를 점령했을까. 그는 그런 생각을 했다.(K)

ミョンウは遠い所を見ていた。知らない間に天井(の)片隅に蜘蛛が蜘蛛(の)糸を張っておいたのが見えた。いつあの蜘蛛はどのように九階まで上がってきていつあの奥まった領土を占領したのだろうか。彼はそのように考えた。

(11), (12)において, Xは場所を表し, PもXへの移動を表しており, またX+-까지は状況語である。従って格助詞と見做して差し支えないが, (1)~(3)とは異なり, 文脈次第で格が表す論理関係以外の副詞的な意味, つまり「強調」を表すとも考えられる。

このような例について寺村(1991:115)では次のような例を挙げている。

- (13) 飛行機で仙台まで行く。
(14) 仙台まで恋人を追って行った。

寺村(1991)はこれらの例に「そんなに遠いところまで」, 「情熱の強さを強調する効果」が含まれているとした。また次の例も先の例と同様に副詞的な意味が汲み取れるものとした。

- (15) 大晦日まで働いた。

もちろんこういった場合を取り立て助詞として見ることもあり得るが, しかしこれは文脈への依存度が高い視点であるので, 格助詞と特殊助詞(或いは取り立て助詞)との識別は, やはり文の成分如何によって区別されるべきだろう。

従って特別な文脈が与えられない限り, 本稿ではこういったものも含めて, ‘-까지’ と結び付いた語が状況語であって, ‘-까지’ に任意性が認められない場合は格助詞とする。

さらに(11)~(14)の特徴として, (1)~(3)の場合と異なり, これらは他の格助詞, (11), (12)は向格助詞 ‘-에’ に, (13), (14)も日本語の二格に置き換えが可能であるということをつけ加えておく。

次に特殊助詞の特徴として, 接続形語尾との結合が挙げられるが, 以下にその例を挙げる。なお, ここでの ‘-까지’ には任意性がある。

- (15) 난 처음에 집에 가고 싶은 병이 있었지요. 그 향수병에 걸렸기

때문에 중퇴하려고까지 했었어요. (K)

私は最初家に帰りたい病でした。そのホームシックにかかったために中退しようとまで思いました。

- (16) 더군다나 대금업이 도입되더라도 서민들이 돈 구하기 어렵기는 마찬가지 일텐데 세금을 내가면서까지 위험을 감수할 이유가 있겠느냐는 경우도 있었다.(K)

ましてや貸付業務が導入されても庶民たちがお金(を)得ること(の)大變さは変わらないと思われるのに税金を出してまで危険を甘受する理由があるのかという場合もあった。

次に‘까지’が他の助詞と結び付く場合について述べる。

‘까지’はその前後に格助詞や他の特殊助詞を従え得る。まず格助詞+까지の例を挙げる。

- (17) 금호는 현재 부서장급까지만 보급된 자택의 컴퓨터단말기 보급을 사원급으로까지 확산시켜 제안에 관한 한 시공을 초월토록 한다는 방침이다.(K)

クムホは現在部署長クラスまでだけ支給される自宅のコンピューター端末機(の)支給を社員クラスにまで拡散させ提案に関する一つの時空を超越しようとする方針だ。

- (18) 대한상공회의소는 “비자금 파문으로 혼란이 야기된 것은 매우 유감스러운 일이나 전직 대통령의 해명과 대국민 사과가 이뤄진 것은 다행스런 일”이라면서 “이번 비자금 파문이 기업에까지 확산돼 기업인에게 마음의 상처를 주는 일은 절대로 없어야 한다”는 논평을 발표했다. (K)

大韓商工会議所は「裏金波紋で混乱が引き起こされたことは大變遺憾なことだが前大統領の解明と国民に対する謝罪がなされたのは幸いなこと」としながら「今回裏金波紋が企業にまで拡散し企業家に心の傷を与えることは絶対にあってはならない」という論評を発表した。

- (19) 자가통신 설비제도의 목적외 사용 범위를 확대하여 잉여설비 임대대상을 기간통신사업자 뿐만 아니라 부가통신사업자에게까지 단순히 늘림으로써 매듭 지을 성격의 문제가 아닌 것이다.(K)

自家通信設備制度の目的外使用範圍を拡大して剰余設備貸貸対象を

期間通信事業者だけでなく付加通信事業者にまで単純に広げること
で決着つける性格の問題ではないのである。

先に述べたように、特殊助詞の特徴として、主語、目的語の位置に立つ場合
主格、対格助詞は省略されるが、状況語として現れる他の格助詞は省略されず、
X+格助詞+·까지の形式で現われる。従ってこのような形式では‘·까지’が接
尾する語が状況語になっても、先に述べた特殊助詞の特徴と‘·까지’に任意性
があることから、これは格助詞ではなく特殊助詞と判断される。

次に‘·까지’の後に格助詞が現われる場合の例文を挙げる。

(20) 진성의 손이 떨리고 있다고 순녀는 생각했다. 진성은 다비대의
왼쪽 끝에서 오른쪽 끝까지를 모두 헤치고 더듬더니 다시 오른쪽
끝에서 왼쪽 끝으로 헤치고 더듬어 가기 시작했다.(K)
チンソンの手が震えているとスンニョは思った。チンソンはダビデ
の左端から右端までをみな押し分け辿り、再び右端から左端に押し
分け辿っていき始めた。

(21) 철기는 천천히 몸을 일으켜 벽에 기대 앉았다. 목이 타는 것
같았지만 탁자까지의 거리가 까마득하게만 느껴져서 움직이지
싫었다.(K)
チョルギはゆっくり体を起こし壁にもたれ座った。喉が焼けるよう
だったがテーブルまでの距離がはるか遠く感じられ動くのが嫌だっ
た。

この形式で現われる‘·까지’には任意性がないと言えるだろう。(20)につい
ては、‘·까지’を落としても文意は通じ、全くの非文になるという訳ではないが、
‘A에서 B까지」「AからBまで」は日本語のカラ格とマデ格でひとまとまり
をなすのと同様、朝鮮語でもそれらは場所の始点から終点という一つのまとまり
を表すと言える。つまりここでの‘·까지’は、処格助詞‘·에서’に対応する
格助詞であり、それをさらに対格助詞‘·를」「-을」が付くことで、‘A에서 B
까지’+‘·를’として全体を目的語にしている。なお、点線部分‘A에서 B으로’
「AからBに」の‘·으로’は方向を表す助詞なので、この場合も点線部分が一
つのまとまりとして、状況語をなしている。

(21)の‘·까지’はそれを落とすと、完全な非文になってしまうわけではない
が、落としてしまうと本来この文が表している「自分の体からテーブルまでの
距離」という意味よりは「テーブルの長さ」を表す可能性が生じ、曖昧な文に
なってしまう。よってここではこれを格助詞とする。

最後に‘·까지’に他の特殊助詞が結び付いた形式について述べる。

(22) “저 애는 어렸을 때부터 욕심이 많더니만 자식까지도 저렇게 많이 낳았단니까.” 그 말에 사람들이 와아하고 웃었다.(K)

「あの娘は小さいときから欲が多かったけど息子までもあんなに沢山生んだよ」その言葉に人たちがわあっと笑った.

(23) 총과 탄약은 출발 직전에 나누어 주기로 되어 있었기 때문에 그들은 그때까지도 무장이 되어 있지 않았다.(K)

銃と弾薬は出発直前に分けてくれることになっていたので彼らはその時までは武装がされていなかった.

(22)의 예는 ‘-까지’도, 그後ろ에付いている ‘-도’도, それぞれいずれか一方を落としても文が成立する. つまり兩者共に任意性があるので, ‘-까지’は特殊助詞である. また文の成分を見ると X+·까지は目的語に相当する.

一方(23)は, いずれか一方を落とすことは可能だが, 文の成分が状況語であるので, この場合の ‘-까지’は格助詞であり, ‘-도’は格助詞+特殊助詞の特殊助詞に当たると考えられる.

3. 1. 2. -부터

‘-까지’가格助詞としての機能を有する場合と同様に, ‘-부터’「-から」もそれが格助詞である場合には, X+·부터は文中で状況語となる.

(24) "그냥 떠나실 것입니까?" "생각 안해 봤어, 내가 떠난다는 것을 며칠 전부터 알고 있을 것이니까..... 이별이란 슬픈 것이 아닌가? 그냥 갔으면 하는 마음이지만 자네는 만나 보게. 그건 자네의 마음이니까."(K)

「そのままお発ちになるのですか?」「考えてみなかった. 私が発つということを何日か前から知っているはずだから…別れとは悲しいものではないのか?そのまま行ってしまったらという気持ちだが君は会ってみなさい. それは君の気持ちなのだから。」

(25) 다무라는 입을 막고 있다가 다시 큰 소리로 말했다. "출발 전에 일러준 대로 귀대하는 시각을 잊지 않도록 한다. 이를 후 정오부터 시작하여 삼십 분 간격으로 각 조는 차량에서 내렸던 장소에 다시 와야 한다. 5 분 이상 기다리지 않으니 미리 와서 대기하라."(K)

田村は口を閉ざしていたが再び大きな声で言った. 「出発前に言ったように帰隊する時刻を忘れないようにする. 二日後正午から始めて 30 分間隔で各組は車両からおりた場所に再び来なければならない. 5

分以上待たないので前もって来て待機しろ。」

例文はそれぞれ「何日か前」, 「正午」というように, 時を表す語に ‘-부터’ が接尾し, X+·부터が文の成分として状況語をなしている。日本語の「-から」は, 時, 場所, 経路を表す語それぞれと結び付くことが可能であるが, 朝鮮語ではこれらを ‘-부터’, ‘-에서’, ‘-로’ で表し分ける。

また, 例文の ‘-부터’ に任意性はない。従ってこれらは格助詞である。

次に特殊助詞の場合について述べる。

‘-부터’ が特殊助詞の場合も ‘-까지’ の場合と同様, ‘-부터’ が結び付く語が文中で主語, 目的語である場合に, 主格助詞, 対格助詞はそれぞれ現われず, X+·부터の形式で実現する。

(26) 너부터 해. (作)
お前からやれ.

(27) "이 친구야, 지금 고걸 걱정해? 맨처음 선적한 물건부터 도둑 맞았다고 본사에 보고할 셈이야?"(K)
「この野郎め, 今それを心配するのか? 最初船積みしたものから泥棒 (に) あったと本社に報告するつもりか?」

格助詞の場合の X+·부터の Xは, 時を表す語であったが, 特殊助詞の場合は (26), (27)のように時を表さない名詞である。また, (26)は主格助詞が省略されている例であり, (27)は対格助詞が省略されている例である。

‘-부터’ が格助詞の場合に, その意味が「時の始点」を表したのに対し, 特殊助詞の場合は「順序」を表す。格助詞が表す「時の始点」は, 話し手の命題に対する評価を表さず, 客観的事実を表すものだが, その一方, 特殊助詞が表す「順序」という意味は, 話し手にその選択がゆだねられているので, これは主観的という点でモーダルと言えよう。

次に接続形語尾との結合の例文を挙げる。

(28) 그대로 집으로 돌아가고 싶었지만, 회사로 전화를 걸어 보니 회장이 나를 급히 찾는다는 바람에 하는 수 없이 회사로 돌아갔다. 회사에 들어서면서부터 나는 곤욕을 치르기 시작했다. 만나는 사람마다 눈이 휘둥그래져서 어찌다가 그렇게 다쳤느냐고 묻는 것이어서 쥐구멍에라도 들어가고 싶은 심정이었다.(K)
そのまま家に帰りたいかったが, 会社に電話をかけてみると会長が私を急いで探しているというのでしかたなく会社に戻った。会社に入ってから私は屈辱を味わいはじめた。会う人ごとに目を丸めてどう

してそんなにけがをしたのかと尋ねるのでネズミ (の) 穴にでも入り
たい心情だった.

- (29) "방에서는 뭘 했다고 했죠?" "잠을 잤습니다." "몇 시부터?" "고수진 씨를 집에 데려다 주고 돌아와서 바로 누웠으니깐....." 그는 잠시 생각했다. "..... 10시가 좀 넘어서부터 잤습니다."(K)
「部屋では何をしていたと言いましたっけ?」「寝ていました.」「何時から?」「코스진さんを家に送って戻ってきてすぐに寝たので...」彼はしばし考えた. 「...10時少し過ぎてから寝ました.」

これらの例文における ‘-부터’ には任意性があるので, 特殊助詞として見做して差し支えない. しかし筆者の収集した例文には次のように任意性がない場合もあった.

- (30) "한달준은 젊어서부터 돈에 눈이 멀어서 여러 사람을 죽였어."(K)
「ハンダルジュンは若いときからお金に目がなくて色んな人を殺した.」

- (31) 나는 불어를 몰라 계약서 내용에 무엇이 어떻게 명기되어 있는지 모르지만 살다보니 내가 제일 싫어하는 일본놈과 소련놈의 앞잡이가 될 판입니다. 내가 어려서부터 감쪽같이, 사람 한 명 다치지 않은 채 한국은행을 털어봤으면 했지만 내 사주팔자에 납치범이니 탈취범은 언감생심이었습니다. (K)
私はフランス語がわからないので契約書(の)内容に何がどのように明記されているのかわからないが, 生きていて私が一番嫌いな日本とソ連の手先になるところでした. 私が小さいときから鮮やかに人一人怪我させずに韓国銀行に押し入れればと思いましたが, 私の四柱には拉致犯とか奪取犯というのは少しもございませんでした.

(30), (31)における ‘-부터’ は必須であり, これを除くと非文になってしまう¹⁰⁾. このように任意性のない場合をⅢ+서부터¹¹⁾ という一つの語尾として認めるか否かは難しい問題である. 何故なら任(2005)で記したⅠ+고도의場合には, 任意性がある場合とない場合とで, 前者は ‘and’ の意味を表し, 後者は ‘but’ の意味を表すというように, 明らかに意味が異なるものであったが, (30), (31)の ‘-부터’ は, 任意性のある(29)の ‘-부터’ と表す意味が等しいからである. 本稿ではこのような例を挙げるに留め, この際の ‘-부터’ を語尾の一部と見做すべきか否かの問題は今後の課題としたい.

最後に格助詞と特殊助詞との区別が曖昧な場合の例を挙げる.

- (32) 오늘날의 전쟁 무기는 고도화되고 전문화되고 있는 실정이다. 세균도 일종의 무기로서 완벽하다. 내가 유럽제국을 돌아보던 젊은 시절부터 느낀 바지만 세균 무기 중에는 페스트가 가장 유력한 무기라는 사실을 알았다. (K)

今日の戦争武器は高度化されて専門化されているのが実情である。細菌も一種の武器として完璧である。私がヨーロッパ諸国をまわってみた若い時期から感じたことだが、細菌武器(の)中ではペストが最も有力な武器だという事実がわかった。

ここでX+・부터は状況語であって、Xは時を表す語句であるので格助詞としての条件を満たしているが、この場合の‘-부터’には任意性がある。つまりそれは特殊助詞としての特徴も備えているのである。

しかしこの文で‘-부터’を落とすと、それは「過去の一点」を示すことになり、元の文の「ある時点からの継続」とは異なり、文の命題が変わってしまうことになる。

日本語の取り立て助詞がそうであるように、朝鮮語の特殊助詞も命題の範列関係を示すものであって、命題を変えるものではない¹²⁾。従って、この場合はこれを格助詞と見做すべきである。

なお、‘-부터’が格助詞である場合の用例(24), (25), (32)を見ると、‘-부터’と結びつくXが、時を示す語であるというだけではなく、Pもまた、Xから始まる状況の継続を表していることが明らかである。

次に‘-부터’と他の助詞が結びつく場合について述べる。

‘-까지’と同様に、‘-부터’もその前後に格助詞や他の特殊助詞を従え得る。まず格助詞+・부터の例を挙げる。

- (33) "어떤 부당한 박해라도 원망이나 불평없이 참고 받는 것을 이 양으로부터 배우시오. 얼마나 조용히 죽음을 받아들이고 있나. 또한 귀 뒤에서부터 가죽이 벗겨져나가는 고통을 아무 저항 없이 어떻게 견디고 있나를 잘 보십시오." (K)

「いかなる不当な迫害でも恨みや不平なく我慢して受けることをこの羊から教わりなさい。いかに静かに死を受け入れているか、また耳(の)後ろから皮がはがされていく苦痛を何の抵抗なくどのように耐えているかをよくご覧なさい。」

- (34) 젊은이가 바구니를 집어들고 막 떠나려는데 마을 쪽에서부터 악대들의 주악이 들려왔다. (K)

若者が籠を持って今まさに発とうとするとき、村(の)方から楽隊の演奏が聞こえてきた。

まず(33)の下線部の ‘귀 뒤에서부터’ は、一見すると X+-에서 (日本語のカラ格に相当) +-부터のように分解することが可能のようだが、X+-에서に ‘-부터’ が接尾することによって新たに「順序」の意味が加わった訳ではないので、これは ‘-에서부터’ という一つの格助詞として扱うべきだろう。(34)の例も同様である。

次に-부터+特殊助詞の場合の例を挙げる。

- (35) 몇 년 전까지만 해도 인편으로 어렵פות이나마 가족의 소식을 듣기는 했지만 재작년 겨울부터는 소식이 끊겨 궁금하기 짝이 없었다.(K)

何年前までは人伝に曖昧ながらも家族の消息を聞きはしたが一昨年(の) 冬からは消息が絶え気にかかって仕方なかった。

下線部の ‘겨울부터는’ で、X+-부터+-는のXは「時」を表す名詞であり、ここで ‘-부터’ が表す意味も「順序」ではなく「時の始点」を表している。ただし ‘-부터’ の任意性については、‘-부터’ を落としても非文とはならないが、「時の始点」ではなくなってしまう、命題を変えてしまう。ここでは ‘-에’ という日本語の二格に相当する時間を示す格助詞と置き換えが可能なことから、特殊助詞ではなく格助詞と見做し得る。

最後に-부터+格助詞の例を挙げる。

- (36) 박 대위는 그녀의 짙은 화장에 눈살을 찌푸리며 마주 앉았다.
"나, 알지요?" "왜 모르겠어요?" 첫 대꾸부터가 만만치 않았다.(K)
パク大尉は彼女の濃い化粧に眉をひそめて向かって座った。「私、覚えてますよね?」「どうしてわからないのですか?」最初の返事からが手ごわかった。

この場合、Xは「時」以外の名詞であり、‘-부터’ に任意性が認められ、この文で ‘-부터’ が表す意味は「順序」である。従ってこの ‘-부터’ は特殊助詞である。

3. 1. 3. -는커녕

채완(1995:20)は ‘-는커녕’ の形式ではなく、‘-커녕’ という形式が、その分布上から特殊助詞であると判断した。以下に채완(1995:20)から例文を引用する。

- (37) 앓기[*커녕, 는커녕] 아주 건강하던걸요.
病む[どころか]とても健康でしたよ。

(38) 많이[*커녕, 는커녕] 하나도 못 주겠다.
たくさん[どころか]一つもやれない.

(39) 우승[커녕, 은커녕] 예선에도 못 들었다.
優勝[どころか]予選にも入らなかった.

채완(1995)における「分布」がいかなるものなのかは、詳しく述べられていないが, 채완(1995)が挙げる(37)~(39)の用例を見る限りでは, 体言形語尾, 副詞, 名詞というように広い範囲に接尾しうるということを目指していると思われる.

채완(1995)は, 최현배(1961)が名詞+커녕の例を挙げているとしながら, (39)を例として, 現在では名詞に‘커녕’が付く際, ‘-은/-는’を先行させる方が自然な用法としながらも, 名詞+커녕の形式を認め, ‘커녕’を単独で特殊助詞としている.

しかし(37), (38)は‘커녕’の形で非文になってしまうことから, ‘는커녕’の形式ではなく‘커녕’の形式を特殊助詞であるとする事自体矛盾がある.

そして筆者が行ったインフォーマントとのインタビューで, 体言+커녕の形式は完全な非文であり, 必ず‘는커녕’の形式で用いられなければならないとのことであった. 従って(39)も‘우승은커녕’とされなければならない.

以上のことから(37), (38)だけではなく, (39)も‘는커녕’という形で文中の機能を果たすものと見做すべきである¹³⁾.

次に‘-은커녕/-는커녕’が特殊助詞であるか否かについて検討したい.

(40) 네개의 창문을 모두 열어 놓았지만 시원한 바람은커녕 후텁지근한 열기만 밀려 들어오고 있었다.(K)
四つの窓を全て開けておいたが涼しい風どころか蒸し暑い熱気だけ押し寄せていた.

(40)は‘시원한 바람’(形容詞連体形+名詞)「涼しい風」という名詞句に‘은커녕’が接尾しているが, ‘은커녕’の後ろには‘후텁지근한 열기’(形容詞連体形+名詞)「蒸し暑い熱気」という名詞句が来ている. つまり‘A 는커녕 B’「A どころか B」というように, ‘은커녕’によって前後の名詞句が結び付けられている. 従ってこれは並立助詞である.

以下, 他にも例を挙げる.

(41) 결국 그녀의 자백에 기대를 걸어 보았지만 그녀는 시간이 갈수록

자백은커녕 더욱 완강해지기만 하는 것이었다.(K)

結局彼女の自白に期待をかけてみたが彼女は時間がたつほど自白どころか一層/頑なになるばかりだった。

(42) 두 사람 사이에 갑자기 불기 시작한 불은 시간이 흐를수록 식기는커녕 더욱 맹렬한 기세로 타고르고 있었다.(K)

二人(の)間に突然つき始めた火は時間がたつほど冷めるところか一層猛烈な勢いで燃え上がっていた。

(40)では‘A 은커녕 B’のA, Bをなすものが共に等しい名詞句であったが、(41)ではA=‘자백’という名詞, B=‘완강해지기’¹⁴⁾は動詞語幹+接尾辞+体言形語尾からなる名詞句であり、(42)はA=‘식기’動詞語幹+体言形語尾で名詞句, B=‘맹렬한 기세’形容詞の連体形+名詞からなる名詞句というように、(41)と(42)は(40)のようにA, Bがまったく同じ構造を持つものということではないが、A, Bを‘-는커녕’が結ぶパラレルな関係と見做して差し支えないだろう。

また、‘-는커녕’を並立助詞と見做し得る要因として、(40)の‘-만’や(42)の‘-로’のように、‘A 은커녕 B’の後に特殊助詞或いは格助詞が接尾して、‘A 은커녕 B’を一塊にまとめあげ、文の成分とせしめていることも挙げられる。

なお現行の正書法では‘A 는커녕 B’というように、‘-는’と‘-커녕’の間を空けずに書くと定められているが、実際には空けて書く場合が多いようである。このように現在、分かれ書きに揺れが生じているということを記しておく。

3. 2. 用言活用形との識別

用言活用形が本来の用言としての機能の他に、他の格助詞と置き換えられる場合がある。남윤진(2000)では後者の場合を補助助詞(本稿における特殊助詞)とし、それらの識別を行っている。これについて検討したい。

3. 2. 1. 가지고/갖고¹⁵⁾

남윤진(2000)は‘가지고’には「所有, 所持」の意味を表す動詞と、「対象, 道具, 状態」という関係的意味を表す助詞としての機能を果たす場合があるとした¹⁶⁾。남윤진(2000:121)の例を以下に示す(点線は著者が施した)。

(43) 가평택이 주방의 일을 끝내고, 옥수수 찐 것을 가지고 와서 먹으라고 했다.

カピョン出身の女性が厨房の仕事を終え、とうもろこし(を)蒸したものを持ってきて食べろと言った。

(44) 동생이라도 있었다면 엄마나 할머니가 나를 갖고 이렇게 야단하지 않을 텐데.

弟(妹)でもいればお母さんやおばあちゃんが私をもってして (私に) こんなに怒らないはずなのに.

(45) 토인비는 도전과 응전의 틀을 가지고 인간의 역사를 해석하였습니다.

トインビーは挑戦と応戦の枠をもってして (枠で) 人間の歴史を解釈しました.

남윤진 (2000) において, (43)下線部の ‘가지고’ は動詞 ‘가지다’ 「持つ」の第 I 語基に接続形語尾 ‘-고’ が接尾したもので, 文中で動詞として機能しているとしている.

一方(44)の下線部は与格助詞 ‘-에게’ や ‘-한테’ に置き換えられることから, これは(43)とは異なり, 助詞と見做している. (45)についても ‘가지고’ は具格助詞の ‘-로’ に置き換えられるとし, この場合も助詞とした.

このように남윤진 (2000) は, (44), (45)の場合の ‘가지고’ を助詞としたが, しかし ‘-에게’ や ‘-로’ といった他の助詞に置き換える際, 以下のように, 実際には文中の ‘가지고’ をそのまま ‘-에게’ や ‘-로’ に置き換えることはできない.

(46) *동생이라도 있었다면 엄마나 할머니가 나를 에게 이렇게 야단하지 않을 텐데.

(47) *토인비는 도전과 응전의 틀을 로 인간의 역사를 해석하였습니다.

남윤진 (2000) では ‘가지고’ を単独で助詞としたが, 点線部分から含めてみると, (46)は ‘*나를 에게’ 名詞+対格助詞+与格助詞「*私をに」, (47)は ‘*틀을 로’ 名詞+対格助詞+具格助詞「*枠をで」のように, 日本語同様, 朝鮮語においても, 非文法的な格助詞の並びとなってしまう.

従ってこれは ‘가지고’ が単独で助詞として機能しているのではなく, 対格助詞 ‘-를’ までを含んだ ‘-를 가지고’ 全体で格助詞の機能を果たしていると思ふべきである. つまりこれは格助詞相当の分析的な形なのである¹⁷⁾.

また助詞として機能する ‘-를 가지고’ の ‘-를’ が省略される場合もある.

(48) "혹시 잘못해 불이라도 낼까 봐 내가 잠시 말아 뒀지. 애들은 그런 거 가지고 노는 게 아니야." (영웅)

「もし下手して火でも出すかと (思い) 私がしばらく預かっておい

たんだよ。子供たちはそんなものをもって(そんなもので)遊ぶものではない。」

この例文で下線部は本来‘그런 걸 가지고’のように、対格助詞を表す‘-고’が入るべきであるが、省略されている。

これは現代朝鮮語において、しばしばゼロ格が現われることがあるがその例であって、この場合も‘가지고’そのものが格助詞であることはない。(48)に対格助詞‘-고’を挿入することは可能であり、またその反対に(44)の例で対格助詞を省略することも可能である。従って‘가지고’の直前に対格助詞があってもなくても、名詞+을/을/을+가지고は目的語+述語の構造を持ち、この点では限定=被限定の関係にある。

남윤진(2000)では‘가지고’を助詞と認定する別の理由として‘가지시고’のような尊敬を表す接尾辞の‘-시-’の挿入が不可能であることを挙げた。

これに関して以下に例を挙げる。

- (49) 각하께서는 진지는 고사하고 물도 못 드셨다. (作例)
閣下はお食事はおろか水も召し上がれなかった。

下線部のX는 고사하고において、‘고사하고’は本来‘고사하다’という用言にI-고という接続形語尾が結び付いたものであるが、‘고사하다’の形では用いられず、必ずX는 고사하고という接続形でのみ用いられる。つまりX는 고사하고という形式で固まってしまったものであり、ここで尊敬の接尾辞‘-시-’を挿入することは不可能である。なお、これはA는 고사하고 B「AはおろかB」という形式で用いられることから、並立助詞相当の分析的な形と言える。

この(49)の例は、X는 고사하고全体で並立助詞相当の分析的な形をなすものであったが、このような助詞的な振る舞いをするもの以外でも、用言の接続形I+고の形式を取り、接尾辞‘-시-’の挿入が不可能なものでありながら、用言の活用形として固まってしまったものが現代朝鮮語には多数ある¹⁸⁾。従ってこのような、I+고という用言の接続形の形式において、接尾辞‘-시-’の挿入如何が助詞を識別する際の決定的な要因にはならない。

さらに남윤진(2000:120)は‘가지고’を用言活用形と助詞に識別する際、「文法的意味がどのような活用形で現われるのか確認されなければならない。即ち、同じ用言であったとしても、文法的意味が特定の活用形から固定的に現われる場合に限って文法化の可否を打診することができる。」とし、動詞の場合と異なって、他の格助詞と置き換え可能な‘가지고’は、I+고以外の他の用言語尾と結び付かないことを助詞と見做す理由としている。そして助詞的用法の‘가지고’が‘가지며」「持って」というような、II-며などといった他の語尾を取り得ないと指摘している。これに関して以下に例を挙げる。

- (50) 기껏해야 민심이나 무마하고 자신들의 보신이나 하려는 것일 터인데, 그 비용이 과연 자신들의 호주머니를 털어 낸 것이겠느냐는 것이다. 시민이 낸 세금을 가지고 시민들에게 사과하는 것이야말로 전형적인 공무원들의 뻔뻔주의 타성이란 것이다. (일보)

せいぜい民心でもなだめて自分たちの保身でもしようとするところであろうが、その費用が果たして自分たちのポケットをはたいて出したものだろうかということだ。市民が出した税金をもってして(税金で)市民たちに謝罪することこそ典型的な公務員たちの厚顔主義惰性というものだ。

- (51) 통찰되어야 할 것은 예컨대 현대의 화학적 분석의 수단을 가지고서 사물이나 그 성질의 해명에 착수하려고 하는 경우 사물을 많은 사물로 분해한다는 입장, 요컨대 분명히 원자론의 입장은 사물이 성질과 함께 실제로 있는 그 현실의 모습이 본래인가를 이해하기 위해서는 충분하지 않다는 점이다.(K)

洞察されなければならないことは、例えば現代の科学的分析の手段をもってして(手段で)事物やその性質の解明に着手しようとする場合、事物を多くの事物に分解するという立場、要するに原子論の立場は事物が性質と共に実際にあるその現実の姿が本来(のもの)なのかを理解するためには十分ではないという点だ。

これらの下線部は格助詞との置き換えが可能な例であるが、確かに(50)の‘가지고’を‘가지며’とすることはできない。

しかし(51)の‘가지고서’は、가지고+서に分けられるものではない。

I-고, I-고서는両者が各々「動作の先行」を表す語尾であるため、先に述べたように分解できないものである。I-고서가I-고+서ではない以上、それで一つの語尾である。従って他の格助詞と置き換えが可能な‘-를/φ 가지고’の‘가지고’は語尾が固定されている訳ではなく、I-고서といった他の語尾も取り得るのである。

‘가지고’は単独で用言活用形として機能する場合と、‘-를/φ 가지고’で格助詞相当の分析的な形をなすものがあるとしたが、インフォーマントに文節の境界¹⁹⁾に関するテストを行ったところ次のような結果を得た。

- (52) …옥수수를 말이지, 찢 것을 말이지, 가지고 말이지…

- (53) …나를 갖고 말이지…

朝鮮語では文節(韓国では語節という)を取り出す際、挿入語として‘…

말이지」 「…だね」などを挿入して、その境界を定める。

(52)は動詞としての‘가지고’であり、(43)の文をインフォーマントに見せ、‘…말이지’を挿入してもらった結果である。(53)は助詞と置き換えがきく文であった(44)に挿入してもらったものである。

この二つを比較すると、(52)の動詞の方は、対格助詞‘-를’と用言‘가지고’の間に‘…말이지’が挿入されているが、(53)の助詞と置き換えが可能な用法では、‘-를’と‘가지고’の間ではなく、‘가지고’の後ろに‘…말이지’が挿入されるという違いを見せることから、この用法の‘가지고’は自立性が薄いと考えられる。本稿ではこのような用法の‘-를/φ 가지고’を格助詞相当の分析的な形とするが、現在特殊助詞と認定されているものが、通時的に動詞或いは繫辞から派生したものであるように、‘가지고’もそれそのものが助詞に近づきつつある可能性があるということ(52)、(53)が示唆している。

また、動詞の用法と他の助詞と置き換え可能な用法との意味上の連続性に関して次の例を挙げる。

- (54) 그 사람에게서 온 편지를 가지고 항의한다. (作例)
その人から来た手紙を持って (or もってして=で) 抗議する。

インフォーマントによると、この文は動詞、助詞的用法の二通りに解釈可能とのことである。動詞の場合は「手紙を手を持って」であり、助詞的用法の場合は「手紙を手段に」ということである。

有情名詞+·를/φ 가지고の場合は、格助詞‘-에게’「-に」に置き換えられ、この場合は先に述べたような「持つ」という動詞との意味的な連続性は無いが、手段を表す‘-로’と置き換えられる場合は、動詞「持つ」との意味的連続性が現われるようである。

この境界は‘까지’の場合と同様に、対格助詞の前に立つ名詞と、‘가지고’の後に現われる動詞の意味とのつながりで決定されるようである。

- (55) 펜을 가지고 공부한다. (作例) (具体的な物を表す名詞：
動詞・助詞共に解釈可能)
ペンを持って (or もってして=で) 勉強する。

- (56) 희망을 가지고 공부한다. (作例) (抽象的な名詞：
動詞のみ解釈可能)
希望を持って勉強する。

- (57) 결론을 가지고 항의한다. (作例) (抽象的な名詞：
助詞のみ解釈可能)

結論をもってして (で) 抗議する.

(55)の‘펜」「ペン」の場合は、「ペンを持って」(動詞)、「ペンで」(助詞的用法)の二つが可能であるが、(56)、(57)は「希望」「結論」という共に抽象名詞でありながら、前者は動詞、後者は助詞的用法としてしか解釈されないことから、対格助詞の前に付く名詞と‘가지고’の後ろに来る動詞との意味的なつながりがこれらを分かつことに関与すると思われる。

3. 2. 2. 보고

‘보고’も先に見た‘가지고’同様、動詞「見る」の意味を表す場合と、日本語の二格に相当する‘에게’や‘한테’といった与格助詞と置き換えられる場合がある。

- (58) 윤영이 원하는 것은 그런 것이 아니었다. 「죽은 시인의 사회」라는 영화를 보고 감상적이 될 수 있었던 시기는 이미 먼 옛날처럼 흘러가버려 있었다. (당신)
ユニオンが求めるものはそんなものではなかった。「死んだ詩人の社会」という映画を観て、感傷的になれた時期はすでに遠い昔のように流れていってしまっていた。
- (59) 또 그의 고모 되는 이가 와서 자기 조카를 보고, "인제는 어른이야. 너도 그만하면 자각이 날 때가 되지 않았니. 네 처가 부끄럽지 아니하냐."하고 타이를 적마다 그의 마음은 사람이 부끄럽다는 것보다도 자기를 이렇게 하게 한 자기 아내가 더욱 밉살머리스러웠다.(K)
また彼の叔母になる人が来て自分の甥に「もう大人だ. あなたもそれぐらいになれば自覚が出る頃ではないの. 自分の奥さんが恥ずかしくないの」と諭すたびに彼の心は人に(対して)恥ずかしいということよりも自分をこのようにさせた自分の妻が一層憎らしかった。
- (60) ...또 그의 고모 되는 이가 와서 자기 조카보고,...
- (61) ...또 그의 고모 되는 이가 와서 자기 조카를 보고서,...
- (62) ...또 그의 고모 되는 이가 와서 자기 조카보고서,...

(58)は‘보고’が動詞として機能している例である。

一方(59)の下線部‘조카를 보고’は、‘조카에게’というように置き換えられ、

‘가지고’の場合同様, ‘-를/φ 보고’で格助詞相当の分析的な形と言える。

これについても남윤진(2000)は‘보고’を単独で助詞としているが, その観点から(59)の下線部を見ると, ‘*조카를에게’名詞+対格助詞+与格助詞「*甥をに」という非文が出来上がってしまう。

従って‘보고’が助詞的に振る舞う際は, 必ず‘-를/φ 보고’の形式で他の格助詞と置き換えられるものとしなければならない。(60)~(62)は(59)の下線部を変えたものであるが, (60)はゼロ格の場合を表しているのであって, ‘보고’が単独で他の格助詞と置き換えられるということを表しているのではない。

(61), (62)は用言語尾I·고서も取り得ることを示す例であり, これも‘보고’を単独で助詞と見做せないことを表している。また‘보고’は‘가지고’同様接尾辞の挿入を許すものではないが, これが‘보고’単独で助詞とし得る根拠にならないことは先の‘가지고’で述べた。

남윤진(2000)のみならず, 多くの文法書や辞書において, 助詞的な用法の場合の‘보고’を単独で助詞としているが, 上記の検証からそれらは誤りであることが明らかになった。

以上のことから‘보고’と‘가지고’は, それぞれが対格助詞/φ+‘보고’或いは‘가지고’という構造で格助詞相当の分析的な形を形成する点で類似しているが, 動詞の場合との意味上の連続性を考える際, 多少異なる。

‘보고’は, 動詞「見て」と与格助詞「-に」との意味的な連続性が‘가지고’の場合と比べると大きい。(59)を格助詞と置き換えがきく例として挙げたが, これは動詞としても見做せるものである。つまり動詞として見た場合の「姪を見て」と, 格助詞との置き換えができる「姪に」は, 「姪に向かって」という意味でまとめあげることができ, そこには明確な境界はないようにも思われる。これは‘-를 보고’の前に来る名詞が有情名詞である場合に限られ, その他の名詞が立つ場合は, 動詞としてのみ見做されるのだが, 逆に当該の名詞が有情名詞である場合はこのような境界の曖昧さが生じるということである。

‘가지고’の場合も有情名詞+対格助詞が先立つと, (44)‘나를 갖고’「私に」というように与格助詞の一部を形成することになるのだが, ここで動詞としての「私を持って」とは, ‘보고’の場合ほどの連続性がない。

また分かち書きという表記上の問題を見ても, ‘보고’と‘가지고’を比較すると, 名詞+φ 가지고の場合, 名詞と‘가지고’の間を空けて書く, つまり分かち書きをするのに対し, 名詞+φ 보고では, 分かち書きを必ずするというのではなく, 個人によって名詞と‘보고’の間を空けるか否か異なるというような揺れがある。

ただし文節については‘가지고’と同じ結果を得た。つまり, 動詞としての‘보고’では対格助詞と‘보고’の間にその境界を置くが, 格助詞相当の分析的な形としての‘-를 보고’では‘보고’の後ろに境界を置くようである。

こういったことから, 本稿では‘가지고’同様‘보고’を格助詞相当の分析

的な形をなす一部と見做すが、先に述べた分かち書きにおける違いを考慮すると、‘가지고’に比べて助詞化の度合いが強い、或いは進んでいるものとする。

3. 2. 3. 치고

남윤진(2000)において、‘치고’は動詞として用いられる場合と、助詞として用いられる場合とがあり、前者の意味は「認定, 仮想」を表し、後者は「資格」を表すとした。

남윤진(2000:126)から例を挙げる。

(63) 지구의 자전과 태양 둘레의 궤도 운동을 없는 것으로 치고 지구는 정지하고 있다고 하자.
地球の自転と太陽の周りの軌道運動をないものとして地球は静止しているとしよう。

(64) 디자인 관련 학과의 중진 교수치고 백씨의 강의를 듣지 않은 이는 다섯 손가락으로 셀 정도.
디자인関連学科の重鎮教授をして(教授で)白氏の講義をきかなかった人は5本(の)指で数えるほど。

남윤진(2000:126)からの例(63)は、‘치고’が動詞として機能しているものであり、一方、(64)のような例は、‘교수로서’「教授で」というように、資格を表す格助詞‘-로서’「-で/-として」と置き換えられるものと指摘されている。

また남윤진(2000)が格助詞‘-로서’との置き換えが可能という他に(64)のような場合を助詞と見做す理由として、(63)では「A 를(ϕ)치고 β하다」のように、名詞の後ろに格助詞を随えたのに対し、(64)ではそれが不可能であるということや、‘가지고’や‘보고’同様、接尾辞が挿入できないことを挙げている。

動詞の‘치고’は多義語であるが、辞書の記述の中で助詞的用法‘치고’に関連する意味は、「見做す, 見積もる」に相当すると思われる。菅野他(1988)より例文を挙げる。

(65) 모든 물건을 1000 원으로 치고 계산합니다.
全ての品物を 1000 ウォンで見積もって計算しましょう。

남윤진(2000)は(64)のような助詞的用法の‘치고’を格助詞‘-로서’に置き換えられるとしたが、実際にインフォーマントに用例を見せると、敢えて置き換えるとするならば、という程度のことであって、‘가지고’や‘보고’が他の格助詞に置き換えられたのと比較すると、ダイレクトな置き換えは難しいとしており、文中で格助詞‘-로서’のような意味も含み得るという程度だとした。む

しる助詞的用法の‘치고’は、動詞の場合の意味である「仮想」を基本的意味としているとした。つまり(64)は「教授であれば」という意味を軸にしているとした。

先に(65)の例を挙げたが、「見做す, 見積もる」という意味は, 남윤진(2000)が動詞の意味とした「仮想」と連続性を持つと考えられる。また助詞的用法の意味「資格(一で/一として)」も, (64)を「教授であれば」と考えると, 「仮想」と意味上の連続性があり, 動詞の場合と助詞的用法の場合に意味上の明確な境界が発生するものではないと筆者は考える。

次に‘치고’がI-고以外にもI-고서という用言語尾を取る例として연세국어사전(1998)から例を挙げる。

(66) 학문치고서 서로 아무 관련도 없는 학문은 하나도 없다고 할 것이다.

学問でお互いに何の関連もない学問は一つもないとするだろう。

この場合の意味も‘학문으로서’「学問で/として」というように「資格」と言ってしまうえないこともないが, これも「学問であれば」というように「仮想」或いは動詞の「見積もり」という意味を基本的意味にしているという方がより明確な文意になると思われる。

연세국어사전(1998)では, 下線部の‘치고서’だけではなく‘치고’も助詞と分類しているが, 3. 2. 1. で述べたように‘가지고’, ‘가지고서’との関係同様, ‘치고’はI-고, I-고서といった異なる語尾を取り得るということから, (64)と(66)の‘치고’を助詞と見做すのは難しいと思われる。

確かに(64)と(66)は‘가지고’, ‘보고’の場合とは異なり, 対格助詞+‘치고’の構造をなさないので, ‘치고’を単独で助詞とする可能性も排除できないが, ‘치고’と‘치고서’は先に述べた‘가지고’, ‘가지고서’との関係同様, I-고, I-고서といった異なる語尾を取り得るという点と, 動詞としての‘치고’と(64)と(66)のような助詞的な‘치고’との意味上の連続性を考慮すると, やはり(64), (66)のような‘치고’は用言活用形と見做すべきである。

ただし先に述べたように, ‘가지고’, ‘보고’はその前に格助詞或いはゼロ格が現われるのに対し, (64), (66)のような‘치고’では現われないことから, ‘가지고’, ‘보고’に比べて助詞化が進んでいると言える。なお, 分かち書きも個人差があり, 現時点では曖昧であることも記しておく。

3. 2. 4. 말고

남윤진(2000)では, ‘말고’も動詞として機能する場合と, 助詞として機能する場合があるとし, 前者の場合は「中止」の意味を表し, その直前に名詞句が立ち得ないが, 助詞の場合は「排除」の意味を表し, その直前に名詞句が立ち

得るとした.

- (67) 도산 안창호 선생께서는 이 나라 젊은이들에게 무엇을 가르치셨는가? 거짓말하지 말고 정직하라는 가르침은 오늘날 우리 사회의 도덕성 회복운동의 기본과 일치한다.(K)
島山安昌浩先生はこの国 (の) 若者たちに何をお教えになったのか? 嘘つくこと(を)せずに正直であれという教えは今日私たちの社会の道徳性回復運動の基本と一致する.

- (68) 땀을 많이 흘렸을 때는 냉수를 급격히 마시지 말고 이온 음료, 냉면육수, 열무김치 국물 등 염분이 든 것을 마시는 것이 좋다.(일보)
汗をたくさん流したときは冷水を急に飲むこと(を)せずにイオン飲料, 冷麺 (の) スープ, ヨルムキムチ (の) スープなど塩分が入っているものを飲む方がいい.

- (69) 그 기기묘묘한 트릭을 내가 틀림없이 찾아내서 상자를 깨끗이 열어 보여드릴 테니까요. 글썄, 기계에 대해서는 이 세상에 나 말고 누가 또 있습니까? (K)
その奇奇妙妙としたトリックを私が間違いなく探し出して, 箱をきれいに開けてお見せするつもりですから. さて, 機械についてはこの世に私ではなくて誰がまたいますか?

- (70) 가죽잡바 입을 사나이는 말을 드문드문 떼어가며 이 사람 저 사람 눈치를 살핀다. "땀 배라니요?" 누구인지 일행 중에서 불룩 내민다. "연락선 말고 또 가는 배가 있나 봅디다!"(K)
皮ジャンパー (を) 着た男はことばを途切れ途切りに言いながらこの人あの人 (の) 様子を伺う。「他の船ですって?」誰なのか一行 (の) 中に出し抜けに言う。「連絡船ではなく他に行く船があるようです!」

(67), (68)는남윤진(2000)의分類に倣うと‘말고’가動詞として機能している例文であり, (69), (70)は助詞として機能しているものである.

남윤진(2000)によるとこれらを識別する要因は, 先に述べた‘말고’の前に名詞句が立つか否かという点と, 接尾辞の挿入如何, そして‘말고’が常に他の語尾を取らずに‘말고’の形で固定されているか否かという点である.

まず接尾辞の挿入についてであるが, これは先に見た‘가지고’などの部分で詳しく述べたのでここで再論しないが, I-고の語尾と用言が結び付いた場合の接尾辞の挿入如何は, 助詞の識別の際決定的な要因にはならない.

次に‘말고’の直前に名詞句を取るか否かについてであるが，韓国における研究では(67)，(68)の点線部分，名詞(‘거짓말’) + 用言語幹(‘하-’) + -지，と用言語幹(‘마시-’) + -지의 ‘-지’は，用言語幹と ‘-지’の後ろに来る ‘아니하다(縮約形は않다)’，‘못하다’，そして ‘말다’ とを結び付ける役目を果たす連結語尾としている²⁰⁾。しかし菅野他(1988)では ‘-지’の後ろに対格助詞が接尾し得ることから ‘-지’を用言語尾の体言形としている。

- (71) a. 가지 말고 가만히 있어라.
行くことしないで(行かずに) おとなしくいろ.
- b. 가지를 말고 가만히 있어라. (対格助詞挿入)
行くことをしないでおとなしくいろ.
- c. 가지는 말고 가만히 있어라. (特殊助詞挿入)
行くことはしないでおとなしくいろ.

임흥빈, 장소원(1995)では，連結語尾として ‘-지’の他に ‘-아’，‘-게’，‘-지’，‘-고’を挙げているが，これらは ‘-지’とは異なり，その後ろに格助詞が接尾することはない。菅野他(1988)はこの I-지を体言形としたが，(71)の ‘-지’は菅野他(1988)の見解を受け，‘-아’，‘-게’，‘-고’とは異なる名詞句をなす体言形と見做すのが妥当であると筆者は考える。

남윤진(2000)では(67)，(68)のような場合，‘말고’の直前に名詞句は立たないとしたが，‘-지’を体言形語尾と見做すならば，‘말고’の前に立つものは名詞句ということになり，ここから ‘말고’の動詞活用形，助詞的用法の区別はできないことになる。

ただし，先に述べた助詞的用法の ‘치고’において，その前に格助詞が現われなかったのと同様，(69)，(70)のように句ではなく名詞が単独で말고の前に立つ場合，格助詞は現われない。また ‘치고’では，助詞的用法に ‘치고’，‘치고서’があったのに対して，(69)，(70)のような直前に対格助詞を取らない ‘말고’では，次の例のように体言形語尾 I-지가その直前に来る場合に限って ‘말고서’のように I-고서という他の語尾が接尾し得るが，単独の名詞 + 말고서では成立しないようである。

- (72) 그러나 너무 신경질이 되지 말고서 때로는 쇠고기전골을 먹는 것도 좋겠지요. 요는 혈액이 산성이 되지 않도록 주의하는 겁니다.(K)
しかしあまり神経質になることなしに(ならず)時には牛肉鍋を食べることもいいでしょうね。要するに血液が酸性にならないように

注意するのです.

以上のことから, ‘말고’ は先に述べた ‘가지고’, ‘보고’, ‘치고’ などに比べてはるかに助詞化が進んでいるものであるが, 分かち書きの曖昧さなどを考慮すると, やはり格助詞や特殊助詞といった典型的な助詞とは言い難いと言えよう. 従って本稿では(69), (70)のような ‘말고’ を助詞とせず, 用言活用形とする. しかしこれは用言の活用形から離れつつある度合いが先の3つの形態素よりも甚だしいということも記しておく.

3. 3. 繫辞+語尾及び並立助詞との識別 (いわゆる-이-系特殊助詞について)
-이-系特殊助詞と呼ばれるものは, 通時的に繫辞の ‘-이-’ から派生したもので, 本来繫辞+語尾と見做されていたものである.²¹⁾ -이-系特殊助詞の中には, 本来の形態を離れ完全に助詞化してしまったものと, 繫辞+語尾としての意味, 機能を残し, 両者の区別が判然としないものも多く, 研究者によって見解の異なるものがある.

3. 3. 1. -나

‘-나’ は動詞の第Ⅱ語基に結び付く語尾として見做せるもの, 繫辞+語尾として見做せるもの, 助詞として見做せるものの区別が比較的明確であると言える.

これについては채완(1993)に詳しい. 筆者も채완(1993)の見解を受け入れ, 以下のように語尾, 並立助詞, 特殊助詞に区分する.

まず語尾の場合について述べる.

채완(1993:76)より例を挙げる.

(73) 철수는 공을 높이 차려고 하나 잘 되지 않았다.
チョルスはボールを高く蹴ろうとするが上手くできなかった.

(74) 철수는 공을 높이 차려고 하였으나 잘 되지 않았다.
チョルスはボールを高く蹴ろうとしたが上手くできなかった.

(75) 남편은 시인이나 아내는 소설가이다.
夫は詩人だが妻は小説家だ.

(76) 남편은 시인이었으나 아내는 소설가였다. (作例)
夫は詩人だったが妻は小説家だった.

(73)の例は下線部の動詞하다の第Ⅱ語基に語尾である ‘-나’ が結び付いたも

のである。現代朝鮮語において、例えば‘먹다’「食べる」の第Ⅲ語基である‘먹어’はそれ自体で自立性があるが、第Ⅱ語基の‘먹으-’は自立性がないので、(73)の‘-나’は助詞ではなく、語尾である。また、(74)は(73)に過去を表す接尾辞を挿入したものであるが、それが可能ということからも(73)の‘-나’が語尾であることが伺える。

(75)は繫辞‘-이다’の第Ⅱ語基に‘-나’が結び付いたものであるが、これもまた(76)のように過去を表す接尾辞が挿入可能なことから、‘-나’は語尾と見做される。

次に並立助詞の場合について述べる。以下に例を挙げる。

(77) 그리고 오골계는 고기나 알을 얻기 위해서보다는 보통 약으로 쓰기 위해 길러 왔다.(K)

そして烏骨鶏は肉や卵を得るためよりは普通薬として使うために飼ってきた。

(78) 또한 닭을 상스러운 짐승으로 여겼으므로 닭에 얽힌 설화나 전설이 오늘날까지 슬하게 전해 내려오고 있으며 액을 막고 재앙을 쫓는 상징으로 삼았다. (K)

また鶏を縁起のいい動物として考えたので鶏にまつわる説話や伝説が今日まで沢山伝えおりにきていて厄を防ぎ災いを追い出す象徴とした。

これらは文中で‘A 나 B’の形式を取り、Bの後ろに格助詞を随えて‘A 나 B’のひとまとまりで、各々主語、目的語の成分となっている。つまりここでの‘-나’はAとBとを結ぶ機能を有する並立助詞である。

また次のように‘A 나 B 나’の形式をとるものもある。

(79) 정란은 오히려 밤이 편안했다 . 정란에게는 낮이나 밤이나 어둠 밖에 보이지 않았다. 잠에서 깨어나도 언제나 칠흑의 어둠뿐이었다.(K)

チョンランはむしろ夜が楽だった。チョンランには昼も夜も暗闇しか見えなかった。眠りから覚めてもいつも漆黒の暗さだけだった。

(80) 그것은 그 당시나 지금이나 도무지 풀리지 않는 의문중의 하나였다 . 검찰의 전담요원 역시 그런 의문을 품은 듯했다.(K)

それはその当時も今も到底解けない疑問中の一つだった。検察の専門員(も)またそんな疑問を抱いたようだった。

In-Seok Yang(1973), 홍사만 (1983), (2002)では, (79), (80)のような ‘A 나 B 나’ の形式をとる場合の ‘-나’ を, 普遍数量化を表す特殊助詞としたが, これは ‘A 나’ 単独で普遍数量化を表し得るのではなく, 必ず ‘B 나’ を伴って, 状況語として文中の成分となるものである. 従ってこの場合も ‘-나’ は A, B を結び付ける機能を果たす並立助詞と見做す.

特殊助詞の場合について述べる.

特殊助詞としての ‘-나’ は以下のように文の様々な成分をなし, 自立性のある語と結び付く.

(81) 그 구두는 그야말로 거지나 신으면 어울릴 것 같은 그런 것이었다.(K)
その靴はそれこそ乞食でも履けば似合いそうなもののようなそんなものだった.

(82) "약간은 사치한 곳에 가서 커피나 한 잔하면 어떨까?"(K)
「少しは贅沢なところに行ってコーヒーでも一杯やったらどうだろう？」

(83) 구름 사이에 띄엄띄엄 자리잡은 마을들은 주변의 산들과 조화를 이루면서 그림처럼 아름다운 모습으로 그들에게 나타났다가는 사라졌다. 그녀는 사진에서나 보았던 스위스의 산촌 풍경을 여기서도 보는 듯했다.(K)
雲の間にとびとびに位置する村は周辺の山と調和をなして絵のように美しい姿で彼ら(の前)に現われては消えた. 彼女は写真でも見たスイスの山村風景をここでも見るようだった.

(81)は主語, (82)は目的語, (83)は状況語に結び付いた例である. 特殊助詞が主語, 目的語と結合する際には主格助詞, 対格助詞は省略されるので, (81), (82)は名詞+·나의形式をとっている.

一方, 処格助詞に接尾した(83)の ‘-나’ は, そのまま ‘-나’ を落とすことができる. 従ってこれら全てには任意性が認められるということになる. また特殊助詞のもう一つの特徴として, ‘-나’ は名詞, 数詞, 疑問詞, 副詞, 動詞の第Ⅲ語基と結び付く.

3. 3. 2. -든지

‘-든지’ は, 語尾, 並立助詞, 特殊助詞として認められるものがある. まず, 語尾の場合について述べる.

- (84) "그런 식으로 얘기하지 마. 미안하고 아니고…그게 무슨 소용이야.
차라리 욕을 하든지. 또 어디야?" (당신)
「そんな風に話さないで. すまないじゃなくて…それが何の役に立つ
の. むしろ悪口を言うとか. またどこ (に行くの) ?」

この例は用言の第Ⅰ語基に結び付いた, ‘-든지’ である. 用言の第Ⅲ語基形は先に述べたように自立性があるが, 第Ⅰ語基の場合は自立性がない. 従って‘-나’が用言の第Ⅱ語基と結び付いた場合と等しく, この場合の‘-든지’を語尾と見做す. また次のように接尾辞‘-시-’の挿入も可能であることから語尾であることがわかる.

- (85) 차라리 욕을 하시든지. (作例)
むしろ悪口を仰るとか.

並立助詞の場合について述べる前に, 現代朝鮮語における繫辞の脱落の随意性と-이-系特殊助詞の前に立つ名詞と準媒介母音‘-이-’との関係について述べる.

- (86) 차나 마실래? (作例)
お茶でも飲む?

- (87) 밥이나 먹을래?(作例)
ご飯でも食べる?

これらは特殊助詞の‘-나’だが, 助詞の場合は, (86)のようにその前に来る名詞の音節末が母音であれば, 準媒介母音の‘-이-’は現われず, 反対に(87)のように音節末が子音である場合は, 準媒介母音の‘-이-’の挿入が必須となる.

しかし次の(88), (89)のように, 繫辞+語尾の場合は繫辞の‘-이-’脱落は随意的になる ((90)~(92)は채완(1993)からの引用).

- (88) 이것은 소이다. (作例)
これは牛だ.

- (89) 이것은 소다. (作例)
これは牛だ.

- (90) 남편은 시인이거나 아내는 작가이다.
夫は詩人だが妻は作家だ.

(91) 아내는 작가이나 남편은 시인이다.
妻は作家だが夫は詩人だ。

(92) ?아내는 작가나 남편은 시인이다.

(90)は3. 3. 1. で挙げた例, 下線部が名詞+繫辞+語尾の例である(75)を再引用したものである。先に記した(88), (89)の比較から考えると, 繫辞+語尾の場合は繫辞の‘-이-’脱落は随意的になるはずなので, (92)は自然な文になるはずだが, ここでは非文ではなく不自然な文として채완(1993)は疑問符をつけている。しかし実際にインフォーマントに尋ねると, この文は完全な非文であるとのことである。

つまり(88), (89)で見せた随意性がここでは無いということであるが, -이-系特殊助詞と呼ばれるものの区別が研究者によって異なるのは, このように‘-이-’脱落の随意性に関する見解の違いがあるからである。上記の例について채완(1993)も「繫辞は随意的に脱落するのが原則である」としながら, (92)のような例について詳しい議論はなされていない。またその他の先行研究においても, 現時点でこの問題について明確な議論はなされていないようである。

本来, 繫辞から派生した-이-系特殊助詞の‘-이-’が, 共時的に準媒介母音であるのか, 或いは繫辞であるのか判然としないことが問題なのである。

以上を踏まえて具体的な考察に入る。

채완(1993)では次のような例をもって, ‘-이든지’は‘-이-’(繫辞)+‘-든지’(語尾)である可能性を示した。

(93) 철수든지 영자든지 한 사람이 가야 한다.
チョルスであれヨンジャであれ一人が行かなければならない。

(94) (가는 사람이) 철수이다 - 든지 (가는 사람이) 영자이다 - 든지
한 사람이 가야 한다.
(行く人が) チョルスだ-であれ (行く人が) ヨンジャだ-であれ
一人が行かなければならない。

(95) 자전거든지(?이든지) 차든지(?이든지) 아무거나 탑시다.
自転車であれ車であれ何でも乗りましょう。

(94)は(93)をパラフレイズしたものであり, ‘-이든지’の‘-이-’が繫辞であり, ‘-든지’が語尾であることを示している。また채완(1993)は(95)で, 母音で終わる名詞‘자전거」「自転車」の後に‘-이든지’ではなく‘-든지’が付く方

が自然としながら, ‘-이든지’ が付いても非文ではないとした. つまり 채완(1993) は(95)の ‘-이-’ を繫辞と見做し, 随意的に脱落するとしたのであった.

以上のことから 채완(1993)は ‘-이든지’ を ‘-이-’ (繫辞) + ‘-든지’ (語尾) と見做そうとするが, 次の(96)のように ‘-든지’ が副詞と結び付くことからこれを並立助詞とした.

(96) 어떻게든지 금메달만 따면 장래가 보장된다.
どのようにであれ金メダルだけ取れば将来が保障される.

(97) *금메달을 따는 방법은 어떻게일까?
*金メダルを取る方法はどのようにだろうか?

(98) 언제가 문제가 아니라 어떻게가 문제다.
いつが問題ではなくどのようにが問題だ.

채완(1993)は(97)のように副詞と繫辞は結び付いて述語をなさないが, (98)のように副詞と助詞は結合可能なことから, 結論的に名詞に接尾する ‘-든지’ も含め上記の例を一括して並立助詞とした.

これに対し, 최동주(1999)は, 채완(1993)が挙げた(95)のような例について, ‘-이-’ の脱落の随意性を認め, また(97)を不自然ではあるものの非文ではないとして, 채완(1993)が最終的に並立助詞としたのを退け, 繫辞+語尾とした.

しかし筆者が行ったインフォーマントチェックでは(95)の用例における ‘-이-’ の挿入は完全な非文をなすということであり, また 채완(1993), 최동주(1999)では触れられていないが, (93)に ‘-이-’ を挿入した次の例

(99) *칠수이든지 영자이든지 한 사람이 가야 한다. (作例)

も非文であるとした.

確かに(93)のような例は文の意味において(94)のようにパラフレーズが可能であり, またその際, ‘-이든지’ が ‘-이-’ (繫辞) + ‘-든지’ (語尾) 「-で+あれ」のように, 繫辞から派生した意味上の痕跡を残すものということを筆者も認める. しかし(99)のように末音が母音の名詞の後ろで繫辞である ‘-이-’ の挿入が実際には不可能なことで, 先に見た 3. 3. 1. の ‘-나’ が並立助詞である場合における ‘A 나 B 나’ と同じ構造を持つことから, ‘A 든지 B 든지’ のような場合の ‘-든지’ は, 並立助詞と見做すべきであると考えられる.

次に特殊助詞である場合の ‘-든지’ について述べる. 채완(1993)から例を挙げる.

(100) 언제든지 생각나면 전화해 주세요.
いつでも思いついたら電話してください。

(101) (내일이든지 모레든지 또는) 언제든지~
(明日であれ明後日であれ或いは) いつでも~

채완(1993)は(93)を(94)のように解釈できたのと同じように、疑問代名詞と結び付いた(100)を(101)のように解釈できることから、ここでも‘-이든지’を‘-이-’ (繫辞) + ‘-든지’ (語尾) と見る可能性を示すが、先に述べたように‘-든지’が副詞と結び付くことを考慮して、‘-이든지’の‘-이-’は繫辞ではなく準媒介母音と見做すべきだとし、このように疑問代名詞と結び付いた‘-든지’も並立助詞として括ってしまった。

確かに‘-이든지’は通時的に繫辞から派生したものであり、共時的にもその痕跡を意味の面で残しているので、(100)を(101)のように解釈することは不可能ではないが、(101)のような解釈は元の文である(100)の文中にない‘내일’や‘모레’という名詞までを用いて表しており、これは채완(1993)が挙げた(93)に対するパラフレーズである(94)とは異なる次元の解釈である。

また(100)は(93)とは異なり、文中で‘A 든지 B 든지’の形式で現われていないことから、これを並立助詞とすることはできない。

최동주(1999)には채완(1993)に対するこのような指摘はないものの、(100)のような疑問代名詞 (或いはその連体形+名詞) と‘-든지’の結合が普遍数量化という意味をなすことと、疑問代名詞+‘-든지’が以下の例のように文の様々な成分として現われることから、この場合を並立助詞ではなく、特殊助詞と見做すべきだとしている。

(102) 누구든지 그런 말은 할 수 있다. (主語)
誰であれそんなことばは言い得る。

(103) 그 사람은 어떤 음식이든지 다 먹는다. (目的語)
その人はどんな食べ物であれみな食べる。

(104) 이번 일은 어떻게든지 해 보겠습니다. (状況語)
今回 (の) ことはどのように (して) てもやってみせます。

疑問代名詞と特殊助詞との結合について、任(2004a)と任(2005)で普遍数量化をなす場合について述べたが、‘-든지’についても意味の面だけではなく、‘-든지’の形式まで考慮すると、この場合は特殊助詞と見做すべきであると考える。

3. 3. 3. -라도

남윤진(2000)では‘-라도’を助詞の場合と語尾の場合とに区分している. 本稿でも‘-라도’にはこの二つの場合があると認める.

まず語尾の場合について述べる. 以下, 남윤진(2000)の例をもって説明する.

(105) 배낭을 가볍게 지고 쿠션있는 운동화를 신으면 요통환자라도 등산하는 데 지장없다는 게 이원장의 설명이다.

リュックを軽く背負ってクッション入りの運動靴を履けば腰痛患者でも登山するのに支障ないというのがイ院長の説明である.

(105)' 요통환자라도 = X(그 사람)이 요통환자이다. 그렇더라도腰痛患者でも=X(その人)が腰痛患者だ. そうだとしても

(105)" 배낭을 가볍게 지고 쿠션있는 운동화를 신으니 요통환자였어도 등산하는 데 지장없었다.

(105)" *배낭을 가볍게 지고 쿠션있는 운동화를 신으면 요통환자이라도 등산하는 데 지장없다는 게 이원장의 설명이다.

(105)' は(105)의 ‘-라도’ が随意的に脱落する繫辞 ‘-이-’ + ‘-라고 하여도’ という語尾から成り立ち, それが縮約されたものか否かを検証したものである.

結果的に(105)は(105)' のようにパラフレイズされ, また(105)" のように過去の接尾辞の挿入も可能であることから, 남윤진(2000)はこの場合の ‘-라도’ を助詞ではなく語尾として見ている.

しかし남윤진(2000)は(105)"について, 末音が母音の名詞に接尾する ‘-라도’ が語尾であることを立証するべく, 繫辞 ‘-이-’ を挿入したものの, これが非文になってしまうことについては触れていない. 筆者もこの点についてさらに検討すべきであると考えるが, 以下に述べる特殊助詞である場合の ‘-라도’ とは異なり, (105)' のように ‘-이-’ + ‘-라고 하여도’ に還元し得る点や, (105)" のように過去の接尾辞の挿入が可能な点を考慮し, 本稿では남윤진(2000)の見解を受け入れ, この場合の ‘-라도’ を語尾と見做す.

次に特殊助詞としての ‘-라도’ について, 再び남윤진(2000)より例を挙げる.

(106) 장여사는 남편의 큰 비밀아지트라도 쳐들어가는 기분으로 K 오피스텔 101 호 앞에 와 있었다.

チャン女史は夫の大きな秘密アジトでも踏み込む気分でK オフィステル 101 号 (の) 前に来ていた.

(106)' 남편의 큰 비밀아지트라도 ≠ X(그곳)이 남편의 큰 비밀아지트이다.
 그렇더라도
 夫の大きな秘密アジトでも≠X(そこ)が夫の大きな秘密アジト
 だ. そうだとしても

(106)" *장여사는 남편의 큰 비밀아지트였더라도 쳐들어갔다.

(106)" *장여사는 남편의 큰 비밀아지트이라도 쳐들어갔다.

(106)' は(106)の下線部をパラフレイズした場合に「-라고 하여도 (～だとしても)」に還元できるか否かをテストしたものであり, その結果還元できないことを表している. (106)" は過去の接尾辞の挿入が不可能なことを示している. (106)"は, (106)で見るように, '-라도'の前に立つ名詞の音節末が母音であるため, ことでの '-이-' は媒介母音ではなく, 繫辞の '-이-' を挿入したものであり, その挿入が可能であるか否かを検討したものである.

以上から남윤진(2000)は, (106)のような場合の '-라도' を助詞であるとしたが, 남윤진(2000)における助詞の下位分類では, この '-라도' は補助助詞としている. 術語の問題に過ぎないが, 本稿では補助助詞ではなく, 特殊助詞とする.

なお, 特殊助詞の場合の '-라도' は次のように文中の様々な成分に結び付く.

(107) 아이들을 잘 감시하라니, 제가 선생이지 아이들 감시하는 간수장이라도 된단 말입니까? (당신)
 子供たちをちゃんと監視しろなんて, 私が先生であって子供たち
 (を) 監視する看守(に)でもなるということですか?

(108) 그 오시리스를 부활시키고도 굳이 죽음의 세계에 군림시키는 상상력의 치졸함과 곳곳에서 보이는 원시적 종교 감정의 자취에도 불구하고 아하스 페르츠는 그 부분에 이르러 문득 한 줄기 어떤 눈부신 빛이라도 본 듯한 느낌이었다.(아들)
 そのオシリスを復活させても頑なに死の世界に君臨させる想像力の稚拙さと至る所で見える原始的(な)宗教感情の跡にも拘わらずアハスペルツはその部分に至ってふと一筋の何かまぶしい光でも見た感じだった.

(109) "정말 소설을 쓰고 있네. 그래 그걸 써서 어디 경우지에라도 낼 건가?" (아들)

「本当に小説を書いているのだね. そう, それを書いてどこか同人誌にでも出すつもりなのか？」

(107)は主語, (108)は目的語, (109)は状況語と結び付いた例である. また ‘-라도’はその前に立つ品詞として, 名詞, 疑問詞, 副詞があるのは明らかであるが, 収集した例文の中には用言の第Ⅲ語基に接尾する例は見当たらなかった. また, 数詞に接尾する場合も, 語尾としての ‘-라도’ と結合するものはあったが, 特殊助詞としての ‘-라도’ と結合するものは見当たらなかった. この解明は今後の課題としたい.

以上, ‘-라도’ が語尾である場合と特殊助詞である場合とを, それぞれ 남윤진(2000)の見解を受け入れ, 述べた. ‘-라도’ に関する研究は多数あるが, そのほとんどは語尾としての ‘-라도’ を認めず, 一括して特殊助詞として扱ってしまっている. そういった点で 남윤진(2000)の分析は画期的であったと言える.

‘-라도’ もまた, 本来繫辞から派生した助詞であるので, 完全に助詞化してしまったものと, 繫辞+語尾として機能するものとの識別がつきにくいということが ‘-라도’ が特殊助詞であるのか, 或いは語尾であるのか, 研究者の間で見解が一致しない最たる原因と考えられるが, しかしこれらが共時態で全く異なる意味, 機能を有するのは, 以下の例でもその違いが歴然としていることから伺える.

(110) 커피라도 드실래요? (作例)
コーヒーでも召し上がりますか?

(111) 선생님이라도 그 문제를 못 푸셔. (作例)
先生でもその問題を解けない.

(110)は ‘-라도’ の前に立つ名詞に姉妹項目があり, 不特定の選択を表し, 一方(111)は仮定の意味を含む「一であっても」を表している. なお日本語の取り立て助詞「一でも」に関しても, 不特定の選択を表す「一でも」と, 「一であっても」が縮まった「一でも」の区別を厳密に行っていないようである. 日本語の「一でも」についても今後の課題としたい.

3. 3. 4. -나마

‘-나마’ に関しては数多の研究があるが, これは研究者によって大きく見解が異なる形態素である. 本稿ではこの形態素を, 意味の面からのみ述べた先行研究は除外して論議する. 当該の形態素が助詞であるか否かについて触れた先行研究には, 최동주(1999), 남윤진(2000)があるが, これらもそれぞれ異なっ

た見解を示している。

まず남윤진(2000)について触れたい。

- (112) 뺨을 여기저지 걸어놓아야 산토끼나마 걸릴 것이다.
 脛をあちらこちらにかけておいてこそ山ウサギでもかかるだろう。
- (112)' 산토끼나마 = X(걸릴 것)가 산토끼이다. 그러하나마
 山ウサギ = X (かかるもの) が山ウサギだ. それでも
- (112)" 뺨을 여기저지 걸어놓아야 산토끼였으나마 걸릴 것이다.
- (112)''' 뺨을 여기저지 걸어놓아야 산토끼이나마 걸릴 것이다.

上記の例は‘-라도’の場合同様, (112)下線部のパラフレイズの可否, 過去の接尾辞の挿入, 繫辞‘-이-’の挿入の可否について例証したものである。

남윤진(2000)はこれらをもって‘-나마’が語尾であるとし, (112)は名詞の後ろに本来繫辞の‘-이-’があり(繫辞なので随意的に脱落する), 用言語幹末子音の後に現われるべき媒介母音の‘-으-’は, 繫辞の語幹末音が母音であるのでその後ろで脱落して, 語尾‘-나마’と結び付いたという見解である。

名詞 + (-이-) + (-으-) 나마
 繫辞 媒介母音

つまりこれは名詞+繫辞‘-이-’の第Ⅱ語基(繫辞の音節末が母音であるので‘-으-’が脱落する)+‘-나마’が, 繫辞の随意的脱落によって, 名詞+‘-나마’として具現したということである。

一方, 최동주(1999)は次のような見解を示している。

- (113) 철수나마/*철수이나마 곁에 있으면 좋을텐데.
 チヨルスでも傍にいてくれたらいいのに。
- (114) 자주 오지는 못해도 편지나마 가끔 해라.
 頻繁に来ることはできなくても手紙でも時々書きなさい。
- (115) 그렇게나마 해 주십시오.
 そのようにでもしてください。
- (116) 기어서나마 갈 수 있으니 다행이지。

割り込んででも行けるから幸いだね.

- (117) 흐릿하나마 별도 얹게 흘렀다.
曇ってでも星もうっすら流れた.

최동주(1999)は(117)の下線部について, ‘흐릿하다’の語幹部分, ‘흐릿하-’(用言の第Ⅱ語基) + ‘-으-’(媒介母音) + ‘-나마’(語尾)であったものが, ‘흐릿하-’の末音が母音で終わるため, 媒介母音 ‘-으-’が現われず, ‘흐릿하나마’となった可能性があるとし, またその他の例についても用言語幹+-(으)나마(語尾), 或いは名詞+ ‘-이-’(繫辞)+-(으)나마(語尾)と分析することが全く不可能ではないとした。

しかし上記の例で(113)のように‘-이-’の脱落が必須であること²²⁾と, ‘-나마’が(113)~(117)のように様々な品詞と結合し, また文の成分をなすことから, これら全てを一括して特殊助詞とした。

以上から, 최동주(1999), 남윤진(2000)の見解の相違は, まず(112)^mと(113)にあるような, 母音で終わる名詞の後ににおける‘-이-’の脱落が準媒介母音であるから必須なのか, 或いは繫辞であるから随意的であるのかということにあると思われる。

これについて実際にインフォーマントチェックを行うと, (112)を(112)^rのように解釈するのは可能であるとしながらも(112)^m, (112)^mについては非文であるとした。つまり최동주(1999)の(113)の分析が正しいということになる。

また, インフォーマントに対するテストで, 尊敬の接尾辞‘-시-’を使った文を確認したところ次のような結果を得た。

- (118) 어머님이나마 고향에 다녀오시죠. (作例)
お母様でも/田舎に/いらっしゃってください.

- (119) *어머님이시나마 고향에 다녀오시죠. (作例)

接尾辞‘-시-’の挿入が不可能であることから, ‘-이-’が繫辞, ‘-나마’が語尾であるとすることはできない。

このような結果から, 남윤진(2000)が示した‘-이-’が繫辞で‘-나마’が語尾であるという見解は受け入れがたい。

(112)の例は名詞に接尾した‘-나마’であったが, 次のように特殊助詞の場合の‘-나마’は, その他の自立性のある語に接尾する。

- (120) 토지와 부동산의 취득과 운영, 상속과 양도의 모든 과정에 걸친
현행 조세법규나마 엄정하게 집행되었다면 과연 이렇게 방대한

토지보유와 투기가 가능했을까. (일보)

土地と不動産の取得と運営, 相続と譲渡の全ての過程にかかる現行 (の) 徴税法規でも厳正に執行されたら果たしてこんなに膨大な土地保有と投機が可能だったろうか?

- (121) 하지만 그 분도 석대가 하고 있는 엄청난 속임수에까지는 생각이 미치지 않는 모양이었다. 언제나 의혹의 눈을 번쩍이면서도, 석대가 이미 확보하고 있는 권위나 우리 학급을 움직이는 기존질서는 인색하게나마 인정을 해주었다. (영웅)
しかしその方もソクテがしているとてつもない詭計にまでは考えが及ばなかったようだった. いつも疑惑の目を光らせながらも, ソクテが既に確保している權威や我々のクラスを動かす既存秩序は吝嗇ながら認めてあげていた.

(120)は名詞に接尾した‘-나마’であり, (121)は副詞形語尾に接尾したものであるが, 後者の場合も副詞という単語としての自立性が認められるので, ここの‘-나마’も特殊助詞と見做される.

以上から名詞及びその他単語としての自立性のあるものに接尾する‘-이’を脱落が必須である準媒介母音とし, ‘-나마’は特殊助詞とした최동주(1999)の見解は正しいと思われる.

しかし최동주(1999)は(117)のような用言の第Ⅱ語基, つまり自立性のないものに接尾する‘-나마’までを助詞としているが, その分析には同意しかねる.

従って本稿では次のような‘-나마’を語尾と見做し, 特殊助詞とは区別する.

- (122) 한마디로 국민 모두가 ‘총체적 불안심리’에 휩싸인 꼴이다. 당국도 국민들의 이런 불안 정서를 읽었음인지 또 다른 재난을 막기 위해 안전 점검에 나서는 등 비상이 걸렸다는 소식이다. 뒤늦으나마 다행스런 일이라 할 것이다. (일보)
一言で国民皆が‘總体的不安心理’に包まれた形である. 当局も国民のこのような不安情緒を読んだのかまた他の災難を防ぐために安全点検に出るなど非常事態がかけられたという消息である. 遅いながらも幸いなことだと言えらるだろう.

- (123) 지난해 12 월중 산업생산과 설비투자 등 대부분의 산업활동 지표들은 증가세로 반전돼 침체국면에 시달리던 국내경기가 미미하나마 회복될 조짐을 보이고 있다. (일보)
昨年 12 月中産業生産と設備投資など大部分の産業活動指標は増加 (の) 勢いに反転し沈滞局面に陥っていた国内景気が少しでも回

複する兆候を見せている。

- (124) 덮어씌우듯 하는 사내의 말에 아하스 페르츠는 처음으로
가날프나마 항의가 담긴 말을 했다.(아들)
覆い被さるようにする男のことばにアハスペルチュは初めて
弱々しいながらも抗議のこもったことばを言った。

これらは用言の第Ⅱ語基に‘-나마’が接尾した形である。(122)は뒤늦다という用言の語幹の末音が子音であるため、‘-나마’の前に媒介母音‘-으-’が現われた例であり、(123)は名詞+하다、(122)は形容詞に‘-나마’が接尾した例であるが、これらは語幹の末音が母音であるため、‘-으-’が現われない。

先にも述べたが、用言の第Ⅱ語基はそれ自体では単語の形をなすほどの自立性はなく、単語でないものに助詞が接尾することはないので、この場合の‘-나마’は語尾と見做される。

以上の例から、‘-나마’が語尾である場合と特殊助詞である場合とに分けられるのは、その前に来るものに単語としての自立性があるか否かという点であることが明らかになった。

4. おわりに

4. 1. まとめ

- ・ ‘-까지’, ‘-부터’

格助詞として機能する場合と、特殊助詞として機能する場合がある。格助詞の場合、X+-까지 / -부터は文中で状況語という成分をなし、任意性がない。そしてX+-까지 Pにおいて、Xは時、場所、空間を表すものであり、PもXによって示されるものの移動、範囲、限界を表すものである。そしてX+-부터 PにおいてXは時を表し、Pはそれを受けるものである。つまり格助詞として機能する‘-까지’と‘-부터’のXとPは限定=被限定の関係をなす。

特殊助詞の場合は任意性があり、X+-까지のXには時、場所、空間以外を表すものが立ち、X+-부터も時以外のものが立つ。‘-까지’, ‘-부터’共に文の成分として主語、目的語になる場合は、X+-까지 / -부터のように格助詞は脱落する。その他の格助詞との結合においては、その格助詞は省略されずそのまま現われ、それに接尾する。この場合文の成分としては状況語をなすが、格助詞の場合とは異なり、任意性がある。

格助詞と特殊助詞との境界が曖昧なものを識別する際には、‘-까지’, ‘-부터’が接尾する語が文中でどのような成分になるのか、そして任意性があるか否かが決め手となるが、それ以外にも命題の範列関係を示すか否かも判断材料となる。

また‘-까지’も‘-부터’もその前後に格助詞、特殊助詞を従え得る。

・ ‘-는커녕’

‘-는커녕’を単独で助詞とすることはできず、必ず ‘-는커녕’ という形式で用いられる。またこれは特殊助詞ではなく、‘A 는커녕 B’ 「A どころか B」 というように、‘-는커녕’ によって前後の名詞が結び付けられていることから、並立助詞と見做される。

・ ‘가지고’, ‘보고’, ‘치고’, ‘말고’

‘가지고’ と ‘보고’ は動詞として機能する場合と、他の格助詞に置き換えられる場合があるが、後者の場合、‘가지고’ と ‘보고’ は単独で他の格助詞と置き換えられるものではなく、‘-를/φ 가지고’, ‘-를/φ 보고’ の形式をもって格助詞と置き換え可能であり、これは格助詞相当の分析的な形と言える。前者は格助詞 ‘-에게’, ‘-한테’, ‘-로’ に置き換え可能であり、後者は ‘-에게’, ‘-한테’ に置き換え可能である。ただし両者とも動詞の場合と、格助詞に置き換えが可能な場合との区別が曖昧な場合もあるが、‘가지고’ の場合は X를 가지고 Pの Xと Pの意味的な繋がりによって両者はある程度区別され、‘보고’ の場合は Xが有情名詞に限って両者の区別に関して曖昧さが生じ、その度合いは ‘가지고’ の場合よりも甚だしい。

また ‘가지고’ も ‘보고’ も、直前の対格助詞との間に生じる文節の境界は、動詞の場合と格助詞として置き換えられる場合とを比べると、後者がより自立性がないように思われるが、その中でも ‘보고’ は分かち書きの観点から ‘가지고’ よりも一層助詞化が進んでいる段階と言える。

‘치고’ は動詞の場合はその直前に対格助詞が現われるが、格助詞 ‘-로서’ との置き換えが可能な場合は対格助詞はその直前に現われない。従って ‘치고’ を単独で助詞と見做す可能性もあるが、‘치고서’ のように I-고서 という他の語尾を取り得ることと、動詞の ‘치고’ との意味的な関連性から助詞ではなく、用言の活用形とする。ただし ‘가지고’ や ‘보고’ に比べると対格助詞が現われない点などからこれらよりもさらに助詞化が進んでいるものである。

‘말고’ は置き換えられる格助詞がないものの、その直前に対格助詞が現われる場合と現われない場合があり、先行研究では前者を動詞と見做し後者を助詞としているが、体言形語尾 I-지 に接尾する場合に限ってという制約があるものの、I-고서 という他の語尾を取り得るので、本稿ではこの場合も用言の活用形と見做す。ただし先の3つと比べると最も助詞化しているものである。

・ ‘-나’, ‘-든지’, ‘-라도’, ‘-나마’

‘-나’ は用言の第Ⅱ語基に接尾する語尾の場合と、A 나 B 或いは A 나 B 나

の形式で並立助詞になる場合、そして名詞、数詞、疑問詞、副詞、動詞の第Ⅲ語基に接尾する特殊助詞の場合がある。特殊助詞の場合に限って任意性が認められる。

‘-든지’は用言の第Ⅰ語基に接尾する語尾の場合と、A든지 B든지の形式で現われる並立助詞の場合、そして特殊助詞の場合は疑問代名詞+‘-든지’、或いは疑問詞の連体形+名詞+‘-든지’の形式を取り、文中で様々な成分をなす。またその際、普遍数量化の意味を表す。

‘-라도’は語尾の場合と特殊助詞の場合があり、語尾の場合は‘-라도’をパラフレイズした際に‘-이-’（繫辞）+‘-라고 하여도’（語尾）に還元することが可能であり、過去の接尾辞の挿入も可能である。X+‘-라도’のXの末音が母音で終わるものにおいて‘-이-’が現われないのは、繫辞の随意的な脱落によるものである。

特殊助詞である場合の‘-라도’では語尾の場合に可能であった、‘-이-’（繫辞）+‘-라고 하여도’（語尾）への還元と、過去の接尾辞の挿入が不可能である。‘-라도’が特殊助詞である場合、‘-라도’が接尾した語は文中で様々な成分をなし、‘-라도’は名詞、疑問詞、副詞に接尾する。

語尾の場合と特殊助詞の場合との識別は困難な場合もあるが、語尾の際現われる意味である「-であっても」という仮定の意味と、‘-라도’の前に立つ名詞に姉妹項目があり、「不特定の選択」の意味を表す特殊助詞の場合とは厳密に区別されるべきである。

‘-나마’も語尾の場合と特殊助詞の場合があり、単語としての自立性の無い用言の第Ⅱ語基に接尾した‘-나마’は語尾である。特殊助詞の場合は、自立性のある名詞や副詞に接尾する。

4. 2. 今後の課題

本稿では既存の研究で特殊助詞目録の項目の不一致が甚だしいものについて考察を行った。特殊助詞なのか、或いは他の品詞なのかという識別の問題は、簡単に明確にし得るものではなく、ある程度特殊助詞と他の品詞との間に連続性があることを想定した上で識別の方法を見極めなければならない。

今回は主に格助詞、並立助詞、語尾とにまたがるものを検討したが、実際にはそれらと接尾辞との境界にまたがるものもあり、これは冒頭で述べたように特殊助詞の全体像が明らかになった上で、その結果をもって考察しなければならないのではないと思われる。

また接尾辞と特殊助詞の境界が曖昧なもの以外にも、否定形における特殊助詞の任意性の問題など、本稿を準備する過程で特殊助詞がはらんでいる様々な問題点を認識することができた。

今後、このような問題を解決すべくさらに綿密な考察を続けていく所存である。

【謝辞】

指導教授である門脇誠一先生には、筆者の留学中という状況をご理解頂き、ご指導と暖かい励ましを頂いた。また先行研究の著者でいらっしゃる東京外語大学の南潤珍先生には、お忙しい中、筆者の分析について貴重なご意見を賜った。今回インタビューに協力して下さったインフォーマントの方々共々あわせてお礼申し上げたい。

なお、本稿の誤りは全て筆者の責任である。

《註》

- 1) 韓国ではこの他に補助詞、補助助詞、限定詞などとも呼ばれ、北朝鮮では‘도움토’と呼ばれている。特殊助詞という名称について홍종선他(2003)の中で「…助詞は名詞に付くのが一般的であって、助詞は格を表すのが一般的であるという前提がない以上、特殊助詞の特殊性を立証するのは難しい。」とし、その名称に問題があることを示唆している。筆者もこれに賛同するが、実際に現行の韓国における研究では、特殊助詞とするのがほとんどのようであるので、これについて議論せず、本稿では特殊助詞とする。
- 2) 日本語訳は原文との対応をしやすくするために敢えて直訳としたため、多少不自然な所がある。また、例文の最後に記した () 内のハングルは原典のタイトルを略したものである。
- 3) 以下にインフォーマントの出身地、年齢、最終学歴を記す（なお性別は全員女性である）。
 - ・ソウル出身(27)慶熙大学卒業。
 - ・ソウル出身(27)ソウル大学大学院修士課程修了。
 - ・ソウル出身(29)ソウル大学卒業。
 - ・済州道出身(29)清華大学大学院(北京)修士課程修了。
 - ・ソウル出身(43)淑明女子大学卒業。
- 4) ○は直接言及しているもの。(○)は直接取り上げて言及していないが、特殊助詞として認めているもの。無印は言及していない、或いは認めていないもの。
- 5) これについては남윤진(2000)に詳しい。
- 6) 남윤진 (2000:154) より例を挙げる。(65)ㄴ. は‘-뿐’が接続形語尾と結び付いた例であり、(66)ㄴ. は‘-대로’が処格助詞と結び付いた例である。

(65) ㄴ. 과목 시간과 관련해서뿐만 아니라 특별 강연식으로라도 꼭 이루어져야 한다고 주장하고 있다.
科目時間と関連してだけでなく特別講演式でも必ずなされなければならないと主張している。

(66) ㄴ. 영회가 학교와 집에 모두 연락을 하지 않고 잠적해 버려, 학교에서는 학교에서대로, 집에서는 집에서대로 걱정을 하였다.
ヨンヒが学校と家にすべて連絡をせず失踪してしまい、学校では学校(で)なりに、家では家(で)なりに心配をした。
- 7) 筆者は‘X+格助詞 P’を「論理的な関係」としたが、鈴木(1972)は連語論の観点から、「限定=被限定(かざり=かざられ)」の関係とした。本稿でも必要な場合にこの「限定=被限定」を用いることにする。
- 8) 本稿で用いる状況語という術語は、鈴木(1972)に拠るものである。鈴木(1972:61)は、「文の部分(文の成分)とは、文の内部構造の要素として(すなわち、文の陳述的なちがいにみてもかわらず、相対的に安定した素材的な内容をかたちづくる要素として)みた文の要素であって、文のなかで線条的に前後の要素から相対的に分離できるものである。」とし、文の成分を主語、述語、対象語、修飾語、状況語、規定語、独立語とに分けた。その中で状況語とは、「主語と述語(あるいは、それに対象語や修飾語のくわわったもの)のあらかずできごと、ことがなりたつ場所、とき、原因、目的をあらわす文の部分である。」とし、また、「状況語は、動き、状態、性質が特定の主語のもとになりたつための外的な状況をあらわすものである。」とした。
- 9) 筆者が収集した用例と区別するために、引用した例文は番号に下線を施した。また沼田(1986)

- 他では、とりたて詞としているが、本稿では取り立て助詞とする。
- 10) 収集した例文に ‘-가지’ ではこのようなタイプは見当たらなかったが、 ‘-부터’ に特有なものであるか否かは、本稿では判断し兼ねる。
 - 11) I, II, IIIはそれぞれ第I語基, 第II語基, 第III語基を示す。語基とは日本の国文法のいわゆる活用形(未然形, 連用形等)に対応する形である。菅野(1981:82,90)を参照。なおこれに関しては註21)で再び詳しく述べる。
 - 12) 益岡(1990:4)は、取り立て助詞はある命題(特定の事態を表す命題)とそれにかかわる別の命題(別の事態を表す命題)の関係を問題にすることから、取り立て助詞は命題の範列関係を示すとした。なおこれについては任(2004a)の3.1.1.参照。
 - 13) 연세한국어사전(1998) (『延世韓国語辞典』)においても ‘-컸’ の形式を見出し語とし、またその例文も挙がっているが、インフォーマントによるとそれらも全て非文とのことであった。
 - 14) (41)では ‘-은컸’ の後ろに ‘더욱」「より」という副詞があるが、これがBの内部にのみ関与するものなのか、或いは文全体に関与するものなのか定かでないため、Bの要素から除外した。なお(42)も同様に扱った。
 - 15) 先行研究その他において、 ‘갖고’ は ‘가지고’ と分布が同じであるため、 ‘가지고’ の縮約形とされている。本稿でもその見解を受け入れ、その代表形を ‘가지고’ とする。なお本稿では ‘가지고’ を自立形態素として見做しているため、先行研究が助詞として扱っている場合に言及する際にもハイフネーションは施さない。
 - 16) 남윤진 (2000) では ‘가지고’ が語尾として用いられる場合もあるとしているが、本稿ではこれには言及しない。
 - 17) 分析的な形について菅野他(1988:1018)では「1単語内の色々な文法的な形(すなわち語幹+接尾辞+語尾)を総合的な形と呼び、補助的な単語を含む2単語以上からなる文法的な形を分析的な形と呼ぶ」としている。
 - 18) その他の例として ‘-는 물론이고」「-はもちろんであり」や ‘-는 막론하고」「-は問わず」などがある。
 - 19) これについては菅野(2004)に詳しい。
 - 20) ‘아니하다(않다)’, ‘못하다’, ‘말다’ はいずれも ‘-지 아니하다(않다)’, ‘-지 못하다’, ‘-지 말다’ のように二文節をなすが、日本語訳でこれらは一文節となるため、本文中で単独の ‘아니하다(않다)’ などについては日本語訳を施さなかった。
 - 21) -이-系特殊助詞を説明するにあたって、日本と韓国における語幹の概念の違いを示す。用言の活用を記述する際、日本では語基を用いて説明する機会が多いが、それが韓国における見解とどのように異なるのかは무라타 (村田) (2000)に詳しい。무라타(2000:140)より

	韓国における語幹	語基論における語幹
잡다	잡-다	잡-다
잡으면	잡-으면	잡으-면
잡아서	잡-아서	잡아-서

韓国では ‘잡-’ までを語幹とし、残りを語尾とするのに対し、日本の語基論では語尾は変化しないものとし、語幹は変化するものとしている。また語基論における語幹は次の表のように語根+語基形成母音からなると考えられている。무라타(2000:141)より

語根	語基形成母音	語基
잡-	-∅-	잡- : 第I語基
잡-	-으-	잡으- : 第II語基
잡-	-아-	잡아- : 第III語基

第Ⅰ語基, 第Ⅱ語基, 第Ⅲ語基を総称して語幹としている。

表にあるように, 語基形成母音は用言の語根の音節末音が子音である際, 第Ⅱ語基では ‘-으-’, 第Ⅲ語基では ‘-아-’ が現われるが, 助詞の場合はその直前の名詞の音節末が子音で終わる際, ‘-아-’ が現われるものが多数ある。배주채(1993)では用言活用の際の語基形成母音を媒介母音と呼び, 助詞の場合に現われる ‘-아-’ を準媒介母音と呼んだ。そして ‘-아-’ を準媒介母音とする助詞を-아-系特殊助詞としている。現代朝鮮語の特殊助詞において, この-아-系特殊助詞の媒介母音 ‘-아-’ は繫辞と形が同じであるため混同されやすく, その後ろに来るものが助詞になるのか語尾になるのか研究者の間で見解の相違が生じることがある。

2²⁾ 脱落が必須であれば ‘-아-’ は準媒介母音であり, ‘-나마’ は助詞であることは先に触れた。

《参考文献》

- 荒正子 (1975) 「から格の名詞と動詞のくみあわせ」, 『日本語文法・連語論 (資料編)』, 麦書房, 東京.
- _____ (1977) 「まで格の名詞と動詞のくみあわせ」, 『日本語文法・連語論 (資料編)』, 麦書房, 東京.
- 井上祐子 (1963) 「格助詞「まで」の研究」, 『日本語文法・連語論 (資料編)』, 麦書房, 東京.
- 大阪外国語大学 朝鮮語研究室 (1986) 『朝鮮語大辞典』, 角川書店, 東京.
- 奥田靖雄 (1978a) 「語彙的な意味のあり方」, 『日本語研究の方法』, 麦書房, 東京.
- _____ (1978b) 「言語の単位としての連語」, 『日本語研究の方法』, 麦書房, 東京.
- _____ (1978/1996) 「格助詞」, 『ことばの研究・序説』, 麦書房, 東京.
- 菅野裕臣 (1977) 「朝鮮語と日本語」, 『講座日本の神話9』, 有精堂, 東京.
- _____ (1981) 『朝鮮語の入門』, 白水社, 東京.
- _____ (1986-7) 「中級講座」, 『基礎ハングル』1-12, 三修社, 東京.
- _____ (1989) 「朝鮮語の構造について—その膠着的特徴と関連して—」, 『学習院大学言語共同研究所紀要』11, 学習院大学言語共同研究所.
- _____ (1995) 「朝鮮語語彙のクラスをめぐって」, 『朝鮮文化研究』2.
- _____ (1996) 「朝鮮語」, 『国文学 解釈と鑑賞』61-1, 至文洞, 東京.
- _____ (2000) 「文法と語彙のはざま」, 『神田外語大学紀要』, 12.
- _____ (2004) 「朝鮮語の形態論的単位について」, 科研費「図們江延流居民生活史の通時的共時的的研究」研究集会, 東北大学東北アジア文化研究センター.
- 菅野裕臣他 (1988) 『コスモス朝和辞典』, 白水社, 東京.
- 金吉鎔 (1975) 「名詞の後につく「ㄴ」の文法機能」, 『朝鮮学報』, 76.
- 工藤真由美(2000) 「「彼は風邪くらいでは休まないよ」—否定のスコープと焦点」, 『言語』, 29-11.
- 近藤泰弘 (2001) 「現代語のとりたて助詞の分類」, 『筑波大学東西文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度別冊日本語のとりたて』, 筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織.
- 洪思満 (1990) 『現代韓国語の特殊助詞の研究』, 慶北大学校出版部, 大邱.
- 定延利之(1995) 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」, 『日本語の主題と取り立て』, くろしお出版, 東京.
- 鈴木一彦他編 (1984) 『研究資料日本文法5 助辞編(一) 助詞』, 明治書院, 東京.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』, 麦書房, 東京.
- 寺村秀夫(1984) 「並列的接続とその影の統括問題—モ, シ, シカモの場合」, 『日本語学』, 3-8.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』, くろしお出版, 東京.

- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティーと人称』, ひつじ書房, 東京.
- 任明秀 (2004a) 「現代朝鮮語の特殊助詞-나/-이냐について」, 北海道大学大学院
修士論文
- _____ (2004b) 「On Some Aspects of a *Thukswucosa* -NA/-INA」,
International Conference on Korean Linguistics XIV, Turkey.
- _____ (2005) 「現代朝鮮語の特殊助詞 -도について」, 『韓国語学年報』, 1,
神田外語大学.
- 沼田善子 (1984) 「とりたて詞の意味と文法—モ, ダケ, サエを例として—」,
『日本語学』, 3-4.
- _____ (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』, 凡人社, 東京.
- _____ (1989) 「とりたて詞とムード」, 『日本語のモダリティ』,
くろしお出版, 東京.
- _____ (1992) 「とりたて詞と視点」, 『日本語学』, 11-8.
- _____ (2000a) 「とりたて」, 『時・否定と取り立て』, 岩波書店, 東京.
- _____ (2001) 「とりたて詞の作用域否定」, 『筑波大学東西文化の類型論特別プロジェ
クト研究成果報告書平成12年度別冊日本語のとりたて』,
筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織.
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」, 『日本語の主題と取り立て』,
くろしお出版, 東京.
- 野間秀樹 (1990) 「朝鮮語の名詞分類—語彙論・文法論のために—」, 『朝鮮学報』, 135.
- 浜之上幸 (1997) 「現代朝鮮語における動作の複数性について」,
『日本語と外国語の対照研究IV 日本語と朝鮮語』, 国立国語研究所.
- 益岡隆志 (1990) 「取り立ての焦点」, 『日本語学』, 9-5.
- _____ (1991) 『モダリティーの文法』, くろしお出版, 東京.
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とはなにか』, 三省堂, 東京.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』, 宝文館出版.
- 油谷幸利他 (1993) 『朝鮮語辞典』(小学館, 金星出版社共同編集), 小学館, 東京.
- 吉川武時編 (2003) 『形式名詞がこれでわかる』, ひつじ書房, 東京.
- 渡辺義夫 (1966) 「カラ格の名詞と動詞とのくみあわせ」,
『日本語文法・連語論(資料編)』, 友書房, 東京.

- 고영근(1993) “우리말의 총제서술과 문법체계”, 일지사, 서울.
- 김석득(1994) “우리말 형태론”, 탐출판사, 서울.
- 김승곤(1989) “우리말 토씨 연구”, 건국대학교출판부, 서울.
- _____ (1996) “현대 나라 말본”, 박이정출판사, 서울.
- 김일성종합대학어문학연구소 조선학연구실(1964) 《조선어문법》,
평양고등교육도서출판사, 평양.
- 김진수(1987) “국어접속조사와 어미연구”, 탐출판사, 서울.
- 남윤진(2000) “현대국어의 조사에 대한 계량언어학적 연구”, 태학사, 서울.
- 류구상(1999) ‘구조문법과 국어 조사’, “국어의 격과 조사”, 한국어학회.
- 무라타 히로시(2000) ‘한국어 용언 활용의 기술방법에 대하여’, “형태론”, 2-1.
- 배주채(1993) ‘현대국어 매개모음의 연구사’, “주시경학보”, 11.
- 서정수(1996) “국어문법”, 한양대학교출판원, 서울.
- 성광수(1999) “격표현과 조사의 의미”, 도서출판 월인, 서울.
- 시정곤(1999) ‘조사의 형태론적 연구’, “국어의 격과 조사”, 한국어학회.
- 연세한국어사전(1998) ‘연세한국어사전’, 연세대학교 출판부, 서울.
- 이남순(1996) ‘특수조사의 통사기능’, “震檀學報”, 第82号.
- _____ (1998) “격과 格標識”, 도서출판 월인, 서울.
- 이석규(1992) ‘현대국어 도움토씨의 의미 연구’, “한국어의 토씨와 씨끝”
(김승곤編), 서광학술자료사, 서울.
- 이승재(1994) ‘-이’의 삭제와 생략’, “주시경학보”, 제13집.

이원근(1995) '도움토씨 '나', '나마', '라도' 에 대하여', "연세어문학", 27.
 _____(1996) '도움토씨의 서법 제약', "국어문법의 탐구Ⅲ-국어 풍사론의 문제와 전망-" (남기심編), 태학사, 서울.
 이익섭, 채완(1999) "국어문법론강의", 学研社, 서울.
 이지양(1985) '융합형 '래도' 에 대하여', "관악어문연구", 10.
 이희자, 이종희(1998) "텍스트분석적 국어조사의 연구", 한국문화사, 서울.
 _____(1999) "텍스트분석적 국어어미의 연구", 한국문화사, 서울.
 _____(2001) "한국어 학습용 어미·조사 사전", 한국문화사, 서울.
 임흥빈(1989) '統辭的 派生에 대하여', "어학연구", 25-1.
 임흥빈, 장소원(1995) "국어문법론 I", 한국방송통신대학교출판부, 서울.
 정동환(1992) '현대국어의 도움토씨 연구', "한국어의 토씨와 씨끝" (김승곤編), 서광학술자료사, 서울.
 조선어문법(1970) 《조선어문법》, 김일성종합대학출판사, 평양.
 조선어문법(1983) "조선어문법", 연변인민출판사, 연길.
 차광일(1981) "조선어토대비문법", 료녕인민출판사, 심양.
 채완(1977) '現代國語 特殊助詞의 研究', "國語研究", 第 39 号.
 _____(1986) '특수조사', "국어생활", 5 호.
 _____(1990) '特殊助詞', "국어연구 어디까지 왔나", 東亞出版社, 서울.
 _____(1993) '특수조사 목록의 재검토', "국어학", 23.
 _____(1995) '韓國語 特殊助詞 研究의 反省省', "朝鮮學報", 154.
 _____(1998) '특수조사', "문법연구와 자료", 태학사, 서울.
 최동주(1999) ' '이' 계 특수조사의 문법화 ', "형태론", 봄철 1 권 1 호.
 최현배(1937/1971) "우리말본", 정음사, 서울.
 최형용(1997) '형식명사·보조사·접미사의 상관관계', "국어연구", 第 148 号.
 홍사만(1983) "국어특수조사론", 학문사, 서울.
 _____(2002) "국어 특수조사 신연구", 도서출판 역락, 서울.
 홍종선의(2003) "한국어 문법론의 연구 현황과 과제", 도서출판 박이정, 서울.

F. R. Palmer(2001) Mood And Modality Second edition, Cambridge university press.
 In-Seok Yang(1973) Semantics of Delimiters, "語學研究", 9 卷 2 号.
 韋旭昇, 許東振(1986) "朝鮮語實用語法", 商務印書館, 北京.
 宣德五(1994) "朝鮮語基礎語法", 商務印書館, 北京.

<出典一覽>

(겨울): 김채원 "겨울의 환 ~밤상을 차리는 여자 ~", "1989 이상문학상 수상작품집 제 13 회대상수상작", 문학사상사, 서울, 1989.
 (그림자): 오정희 "그림자 밟기", "夜會" (오정희), 나남출판, 서울, 1990.
 (당신): 김인숙 "당신", "칼날과 사랑" (김인숙), 창작과비평사, 서울, 1993.
 (사랑): 김수현 "사랑이 뭐길래 1", 제 3 기획, 서울, 1992.
 (아들): 이문열 "사람의 아들", 민음사, 서울, 1979.
 (여자): 신경숙 "배드민턴 치는 여자", 문학과학사, 서울, 1993.
 (영웅): 이문열 "우리들의 일그러진 영웅", "1987 이상문학상 수상작품집 제 11 회대상수상작", 문학사상사, 서울, 1987.
 (일보): "조선일보" (1994 年 12 月分).
 (하나코): 최윤 "하나코는 없다", "1994 이상문학상 수상작품집 제 18 회대상수상작", 문학사상사, 서울, 1994.
 (한국): 모모세 타다시 "한국이 죽어도 일본을 못 따라잡는 18 가지 이유", 사회평론, 서울, 1997.

(K) :

KAIST CONCORDANCE PROGRAM

<http://morph.kaist.ac.kr/kcp/>

현대한국어의 특수조사 목록에 대하여

임명수

훗카이도대학교대학원 박사과정

현대한국어에는 일반적으로 특수조사라고 불리우는 조사가 있으나 이것은 연구자에 따라 목록이 불일치하고 있다. 본고에서는 그 동안의 주요 연구들에서 견해가 일치하지 않는 목록의 형태들을 살펴보고 그것들이 과연 특수조사로서 인정할 수 있는 것인지 검토하였다. 본고에서 다룬 형태들은 ‘가지고’, ‘-까지’, ‘-나’, ‘-나마’, ‘-든지’, ‘-라도’, ‘말고’, ‘보고’, ‘-부터’, ‘치고’, ‘-는커녕’이다.

‘-까지’와 ‘-부터’는 격조사와 특수조사인 경우가 있으며 격조사인 경우 임의성(任意性)이 없고 문장에서 상황어(狀況語)란 성분을 이룬다.

특수조사인 경우에는 주어, 목적어에 접미하는 경우를 제외하면 상황어를 이루지만 임의성은 없다.

‘-는커녕’은 ‘-커녕’ 단독으로 쓰이지 않으며 반드시 ‘-는커녕’의 형식으로 나타나 접속조사의 기능을 가진다.

‘가지고’, ‘보고’는 동사의 활용형으로 쓰이는 경우와 다른 격조사와 대치할 수 있는 경우가 있다. 이들은 ‘-를/ϕ 가지고’, ‘-를/ϕ 보고’의 형식에서 다른 격조사와 대치할 수 있다. 전자는 ‘-에게’, ‘-한테’, ‘-로’와 대치가 가능하며 후자는 ‘-에게’, ‘-한테’와 대치가 가능하다. ‘치고’, ‘말고’도 동사의 활용형으로 쓰이는 경우와 조사적인 기능을 가지는 경우가 있다. 후자의 경우 ‘가지고’, ‘보고’와 달리 그 앞에 대격조사를 취할 수 없으나 다른 어미와 결합할 수 있으므로 본고에서는 이들도 동사의 활용형으로 간주한다.

‘-나’는 ‘Ⅱ-나’인 경우는 어미로, ‘A나 B’, ‘A나 B나’의 형식에서는 접속조사로, 그리고 명사, 수사, 의문사, 부사와의 결합과 ‘Ⅲ-나’에서는 특수조사로 볼 수 있다.

‘-든지’는 ‘Ⅰ-든지’인 경우는 어미로, ‘A든지 B든지’의 형식에서는 접속조사라고 할 수 있으며 특수조사의 경우에는 ‘의문사+ -든지’의 형식을 취하며 보편수량화의 의미를 나타낸다.

‘-라도’는 어미의 경우 ‘-이-’ (계사)+ ‘-라고 하여도’ (어미)로 해석이 가능하며 이 경우 접미사의 삽입도 가능하다. 특수조사인 경우에는 그것들이 불가능하며 명사, 의문사, 부사와 결합한 ‘-라도’는 문장에서 여러 성분을 이루게 된다.

‘-나마’는 ‘Ⅱ-나마’인 경우 어미로, 자립성이 있는 명사나 부사와의 결합의 경우에는 특수조사라고 할 수 있다.